

# 徳富蘇峰記念館

目録 — (28)

## 『坂の上の雲』の群像展

展示期間◇平成二十三年一月五日(水)〜十一月三十日(水)

### ① 海軍

秋山 真之(1868〜1918 明治元々大正7) 伊予松山(愛媛県) 明治・大正期の海軍軍人(中将)。秋山平五郎久敬の子、好古の弟。海兵17期卒。日露戦争では東郷平八郎司令長官のもとで連合艦隊の作戦参謀として、また第一次世界大戦では軍務局長として活躍した。戦術家として知られた。

大正4年4月6日付(封書・墨書)

拝啓益々御清祥欣賀候 然者貴著世界之交局ハ貴社新聞紙上ニ日々拝読御高見ニ敬服致居候折柄茲ニ一冊として御惠贈を辱し殊更感謝ノ至ニ御坐候 右不取取御礼申上度寸楮如此に候 勿々頓首

四月六日

秋山真之

徳富老兄 御座下

封筒表 京橋区日吉町民友社にて 徳富猪一郎様

封筒裏 海軍省 秋山真之

秋山真之將軍を憶う(『人物景観』徳富猪一郎著)

伊予松山藩は、中藩の中位。けれども凡有る方面に人物が輩出した。その中でも秋山兄弟の如きは、特に卓越していた。兄秋山陸軍大將は、武人の典型であった。弟真之海軍中將は、天才的好男児であった。兄は固より千里の駿、然も弟は実に天馬空を行くの概があった。君は日露戦争役には一海軍少佐であったが始終東郷連合艦隊司令長官の帷帳参して、其の畢生の心血を傾倒した。『舷々相摩す』の句、『天佑と神助に由り』の句、『天気晴朗なれども浪高し』の句、今や海戦史上のみならず、殆んど人口に膾炙したる文句の創造者であるが、それは唯彼に取りて、外間に知られたる一些事だ。兄秋山大將は、嘗て追悼会の席上語りて曰く、『弟真之には何も他

に誇る可きもの無い。但だ御国の為めの観念は、未だ一秒時も其の頭脳を去らなかつた』と。これは実に至言である。才の美なる者、或は君に幾き者あらむ。然も其才を挙げて、悉く之を国家に献げんとする献身的の好男児、君が如きは実に希有だ。

東郷 平八郎(1847〜1934 弘化4〜昭和9) 薩摩藩(鹿児島)

明治・大正期の海軍軍人(元帥)。薩摩藩士として薩英戦争・戊辰戦争に参加。明治3〜11年イギリスに官費留学。帰国後天城・比叡などの軍艦の副艦長・艦長を務めた。明治23年呉鎮守府参謀長、明治28年常備艦隊司令長官を経て、明治29年海大校長。明治36年第1艦隊兼連合艦隊司令長官に就任し、日露戦争時には旅順港封鎖作戦を行い、ロシア海軍極東艦隊を黄海海戦で、またバルチック艦隊を日本海海戦で全滅させた。戦後、軍司令部長。大正2年元帥となる。日露戦争の戦功で国民的英雄として尊敬され、海軍部内でも大きな発言権をもった。昭和5年、ロンドン軍縮条約の承認にあたり、条約に強硬に反対した。軍の元老的存在であった。国葬。

明治41年10月10日付(封書・印刷)

拝啓 陳者今般来航ノ米國艦隊司令長官以下乗組諸官ヲ招待シ 来十月二十一日(水曜)午後三時新宿御苑ニ於テ園遊会相催度候間 御光臨被成下度此段御案内申上候 敬具

明治四十一年十月十日

伯爵 東郷平八郎 鐵子

徳富猪一郎様 令夫人

精忠大節の東郷元帥(『人物景観』徳富猪一郎著)

東郷元帥は、皇室の恩寵と、国民の祈願との中に、長へに逝いた。八十八歳と云へば、人壽には決して不足は無い。但だ我等は邦家多艱の日に、此の海軍の一大重鎮を喪うたるを悲しむ。豈に唯だ海軍のみと云はん哉、東郷元帥は、実に我が国家の至宝であった。此人存して国家は重かつた。元帥の武勲は、日本の歴史と云はず、世界の歴史の幾頁を、赫々の光をもて、彩色す可きもの。今更ら我等は之を今日に於て繰り返さんとする者では無い。彼は十七歳にして、鹿児島湾頭に於ける薩英の戦争に於て、始めて砲火の洗礼を受け、爾来京師に於ける禁衛の衛兵となりて、王事に勤め、戊辰の役に及び、函館戦争に於て、目醒しき少年海軍士官として奮闘した。英国留学の八個年は、仕合にも彼をして其の兄弟と共に、十年の役薩軍として

討死するの厄難から免れしめた。幸運の星は、恒に彼が行程を照らした。彼は自らから幸運を要めず、幸運は恒に彼を要めた。此れは偶然ではない。彼は実に国家の爲めに、大なる役目を働らく可く、予定せられていたかの如く思われる。明治二十七八年役に於ける、高陞号の撃沈の如きは、餘りにも今は人口に膾炙している。乃ち三十七八年役に於ける彼の武勲は、三十八年五月二十七日、日本海大海戦を以て、其の絶頂と爲す。苟も日本の歴史の存せん限りは、東郷其人の武勲は存す可きものである。然も我等が東郷元帥に感心するのは、畜だに其の大なる武勲ばかりでなく其の武勲を、一切自ら忘却したるが如き謙退と、其の武人たる分限を恪守して、一切世間功名利達の外に卓立したると、而して苟も其の分限内の事には、断然たる意見を持して、決して之を明言するを回避せざるにある。然も尚ほそれ以上のものがある。

結髪勤皇事 蓋世武勳揚 武勳不要説 精忠凌氷霜

香徳八十八 四海一東郷 邦家多艱日 巋然魯靈光

これは予が元帥の米寿を祝して、数月前贈りたる詩である。未だ調に入らざるも、恐らくは元帥の意中を得たるに庶からむ。我等が元帥に敬服するは、其の精忠の二字である。彼が如くして始めて精忠の臣と云ふことが出来る。然も元帥は逝くも、其の精忠大節は、長へに存して、我が大和民族の前途を指點するの燈明台とならむ。嗟呼悲夫。

有馬 良橘 (1861~1944 文久1~昭和19) 紀州藩 (和歌山県)

明治・大正期の海軍軍人(大将)。明治23年イギリスに出張(回航)し、帰国後、千代田航海長、横須賀鎮守府参謀、常備艦隊参謀を経て、明治37年音羽艦長に配属された。日露戦争中は旅順港閉塞作戦を立案し指揮官の1人として作戦に参加した。その後警手艦長や砲術学校校長を経て、軍令部参謀となる。大正1年以降、第1艦隊司令官、海軍兵学校校長、教育本部長、第3艦隊長官を歴任。東郷の側近中の側近と言われ、東郷死去の際は葬儀委員長も務めた。シーメンス事件の際には、当時の海軍大臣八代六郎から請われ査問委員を務めた。

昭和15年11月14日付(封書・印刷)

東郷記第五二號 昭和十六年十一月十四日 東郷元帥記念會副会長 有馬良橘

徳富猪一郎殿

本會々長子爵阪谷芳郎閣下御病氣ノ為メ 本日午前九時三十五分薨去  
相成候 来ル十七日(月) 青山斎場ニ於テ午前十時ヨリ葬儀同十一時

ヨリ十二時迄告別式執行セラレ候 此段御通知申上候

封筒表 大森区山王町一ノ二八三二 徳富猪一郎殿

封筒裏 東京市渋谷区原宿三丁目二六六東郷神社境内

東郷元帥記念會

桜井 真清 (1872~1951 嘉永5~大正10) 伊予松山(愛媛県)

海軍少将。秋山真之の幼馴染。

昭和16年12月11日付(封書・墨書)

拝啓 陳者時局極めて重大なる折柄 来る十二月十四日(日曜) 午前

十時當神社に於て聖戦完捷皇軍武運長久祈願祭執行仕候間 御繰合御

参拝被成下度此段御案内申上候 敬具

昭和十六年十二月十一日

封筒表 東郷神社社司 櫻井真清

封筒裏 大森区山王町一ノ二八三二 徳富猪一郎殿

封筒裏 東郷神社社司 櫻井真清

東京市渋谷区原宿三丁目二六六番地

『坂の上の雲(二)』司馬遼太郎著

「真之は」十二、三のころ、いつも桜井真清という八つの子どもを秘書のようにしてつれて歩いた。真清の家は、近所であった。ちなみにこの幼童はのち餓鬼大将の真之にまねて海軍に入り、少将まで進んだ。真之はある日この幼童の家であそんでいたとき、花火の火薬調合書のみつけ出した。桜井家は旧藩のころ火術方をつとめていた関係で、その家には岩戸流と宇佐美流の伝書が秘蔵されていたのである。と真之が言いだし、付近の子供をあつめてきて製造にとりかかった。真之は、子供たちそれぞれ係をつくり、硝石をあつめる役、木炭や硫黄を薬研で磨る仕事、紙を切る役、貼る役などをきめ、何日もかかって何発かの打ちあげ花火玉をつくった。さらに花火筒も作った。ところが、これは法度になつてゐる。花火業者が打ちあげ

るにしても警察にとどけ出ねばならず、届け出れば警察は場所を指定し、警官立ちあいのもとで打ちあげられる。「見つかれば死刑ぞな」と、子供たちのなかで渋る者があつたが、「かまうものか。おまわりを相手に勇気をきたえるのだ」と、真之は、子供たちを元気づけた。ある日、真之は日が暮れるのを待ち、十三、四人の子供を町はずれの野にあつめた。真之にとつては花火づくりよりも警官を相手にいたちごっこをするほうがおもしろかつた。「もしおまわりがくれば」と、かれは子供

たち一人々々に逃げるための別々の方角を指示し、持つてにげる道具の役割をきめられた。八つの桜井真清は、火柴箱をもって逃げる係であった。「真清、もし追わえられたら、かまわんけれその火柴箱をむこうの「ごぼう畑にほうりこんでお逃げ」ごぼう畑は葉が大きい。そこへ物をほうりこんでも葉がそれをかくしてしまっだろう。いわば、戦術であった。どかあーんと「流星」という火花があがり、町のひとびとをおどろかせた。何発もあがった。そのうちにはおまわりが駆けこんできたが、真之らは闇にまぎれて逃げ散ってしまった。ある日、警察では多人数の警官をそろえ、子供たちの挙動を昼から偵知し、かれらが野外にあつまってきたとき、それをこっそり包囲していつせいに突進した。このため子供は半分はつかまってしまった。真之は逃げた。が、元兇であることは子供たちの自供で知られてしまったから、警官が秋山家を訪ね、厳重に説諭するよう申し入れた。「私も死にます。おまえもこれで胸を突いてお死に」と、平素おとなしい母親が短刀をつきつけて真之を叱ったのは、このときである。

八代 六郎 (1860~1930 万延元~昭和5) 犬山藩 (愛知県)

明治・大正期の海軍軍人(大将)。水戸浪士 八代逸平の養子。明治10年海軍兵学校へ入学。明治14年に兵学校を卒業(8期卒)。日清戦役中は軍艦高千穂及び吉野分隊長として従軍。その後露国公使館付武官、和泉艦長、海軍大学校選科学生などを経て、日露戦争には浅間艦長として仁川沖海戦から日本海海戦で活躍。海軍大学校長、舞鶴鎮守府司令長官などを歴任。大正3年大隈内閣の海軍大臣となり、シーメンス事件の收拾にあたった。また大浦事件では時の外相加藤高明とともに辞職して野に下るが、その後第2艦隊司令長官、佐世保鎮守府司令長官を務め、大正5年男爵、7年大将へ昇進した。

明治37年4月29日付(絵葉書・墨書 軍事郵便)  
御厚意を感謝す 委細後便可申上候  
四月二十九日

葉書表 東京国民新聞社気付 徳富猪一郎殿  
浅間艦長 八代 六郎

山路 一善 (1869~1963 明治2~昭和38) 愛媛県

明治から大正期の海軍中将。兄は愛媛県師範学校長の山路一遊、日本興業銀行副総裁の佃一予。夫人・すえは山本権兵衛の次女。日本海軍

での航空兵力の導入、整備に尽力し、海軍航空の生みの親と呼ばれた。秋山真之とは同郷・同期。日露戦争では連合艦隊参謀として出征した。

昭和16年6月17日付(封書・墨書)

拝啓 不順の候 益々清勝二恭賀候 陳八拙著「禪之應用」別便を以テ進呈仕候 何卒御笑納之上御叱正之程懇願仕候 敬具  
海軍中将 山路一善

昭和十六年六月十七日

徳富蘇峰先生 玉案下

封筒表 大森山王二ノ二八三二 徳富猪一郎様 親展

封筒裏 目黒区金町一四〇四 山路一善

山本 英輔 (1876~1962 明治9~昭和37) 鹿児島県

大正・昭和期の海軍軍人(大将)。海兵24期。海大。日露戦争では第2艦隊参謀をへて、明治40年軍令部参謀となる。明治44年からドイツに駐在し、第1次大戦開始後は第1艦隊参謀。大正8年軍令部出仕兼参謀となりヨーロッパへ出張。大正12年海大校長。昭和2年以降航空本部長、横須賀鎮守府司令長官、連合艦隊司令長官兼第1艦隊司令長官。昭和6年軍事参議官となる。著書に自伝『七転び八起の智仁勇』(昭和32年)

昭和29年1月1日付(葉書・ペン書き)

御高齢万歳々々 益々御健康ノ程祈上ケマス

現住所 東京都世田谷区代田二ノ八二四飯野方 山本英輔

五月五日以后ノ新住所

東京都世田谷区代田二ノ八七〇番地 山本英輔

葉書表 熱海市伊豆山万晴草堂通 徳富蘇峰様

加藤 寛治 (1870~1939 明治3~昭和14) 福井県

大正・昭和期の海軍軍人(大将)。海兵18期。日露戦争では戦艦三笠の砲術長として活躍する。明治42年イギリス大使館付武官。大正4年戦艦比叡艦長。大正9年海大校長をへて、大正10年ワシントン軍縮会議の随員となり、加藤友三郎全権の主力艦比率、対米6割の受諾に反対して対米7割を主張。昭和2年海軍大将。昭和4年海軍軍令部長となり、昭和

5年のロンドン軍縮会議に際しても、対米7割を主張、強硬に条約の妥結・調印に反対し、帷幄上奏を行つて批准を阻止しようとして更迭され、統帥権干犯問題をおこした。以後海軍内の条約不満派（艦隊派）の中心人物となり、陸軍内の革新派や右翼とも結び、軍備の増強・日本の軍縮条約離脱のため画策した。

明治45年1月25日付（封書・ペン書き）

御令息太多雄殿ニ対スル微意ニ就き特ニ貴書ヲ寄セラレ汗顔ニ不堪候高堂ノ厳格ナル家庭教育ト相俟チ將來有数ノ海軍將校ガラムベキ学務及ビ精神訓育ノ上ニ於テ微力を致ス可ク棠本校生徒一般軍事教育上時代ノ要求ニ伴ヒ有益ナル御高見ヲ寄セラルルノ幸ヲ得ハ本懐至極ニ存候 此機會ニ於テ敬意ヲ表候 敬具

明治四十五年一月廿五日

徳富猪一郎殿 玉机下

加藤寛治

封筒表 東京市青山南町六三三〇 徳富猪一郎殿 親展

封筒裏 海軍兵学校甲ノ二号官舎 加藤寛治

山本 五十六（1884〜1943 明治17〜昭和18） 新潟県

大正・昭和期の海軍軍人（元帥）。明治37年海軍兵学校卒業。軍艦日進乗組候補生として日本海海戦に参加し重傷を負つた。その後須磨・鹿島等の乗組を経て、砲術学校教官となる。大正8年から2年間アメリカに駐在、ハーバード大学に学ぶ。帰国後海大教官、航空本部技術部長、第1航空戦隊司令官等を歴任。昭和9年旧条約の期限切れに伴うロンドン軍縮会議予備交渉に日本代表として派遣された。昭和14年連合艦隊司令長官兼第1艦隊司令長官となり、旧来の海軍の作戦計画に変更を加え、また米・英不可分を主張し、対米戦を無視した対南方武力行使は不可能であると考え、ハワイ真珠湾作戦を立案した。昭和18年南方の海軍基地を視察中、ソロモン諸島上空で戦死した。国葬。

昭和14年11月11日付（封書・墨書）

拝啓 此度御令孫兵学校入学予定世ニ芽出度御選入相成候御儀 誠ニ不堪慶賀謹テ御悦申上候 御高示の御儀乍不及拝供何連其内親しく御本

人ニモ御目ニかかり御注意等も申上度存居候 小生の愚考としてハ此際過度の緊張急速の準備等ハ一切無用ニテ平易の御心構ニテ撰生ニ御注意相成候次第ニ御坐候 右不取敢一筆御返事申上度 向寒御自愛專一奉折上候 敬具  
十一月十一日  
山本五十六  
徳富先生 玉案下

封筒表 東京市大森山王二丁目 徳富猪一郎先生  
封筒裏 青山南町 六ノ八一 山本五十六

齊藤 実（1858〜1936 安政5〜昭和11） 水沢藩（岩手県）

明治・大正・昭和期の海軍軍人（大将）・政治家。海兵6期卒。明治17年アメリカに留学し、米公使館付武官を兼ねる。明治21年帰国、海軍省勤務。和泉・富士各副長、秋津洲・厳島各艦長。第1次西園寺内閣の海相。その後5代の内閣に留任して在任9年、日露戦後の海軍軍備の拡充を推進。大正元年大将に昇進。大正3年辞任。大正8年現役に復し、三・一独立運動勃発直後の朝鮮に総督として赴任。〔武断政治〕から〔文化政治〕への転換をはかった。憲兵警察は廃止するが普通警察を増強するなど治安体制の整備拡充につとめた。昭和7年の五・一五事件の後〔挙国一致内閣〕を首相として組織したが、政党・軍部・官僚それぞれに不満を残した。特に元老西園寺と結んで宮廷人事にまで反平沼驥一郎の立場を買ったことが軍部・右翼陣営の反感を強めた。昭和9年には平沼が背後で糸を引く帝人事件に巻き込まれ、閣内の動揺を乗り切れずに総辞職した。昭和10年内大臣となるが二・二六事件で〔君側の奸〕として襲撃され殺された。

昭和（ ）年5月21日付（封書・墨書）

拝啓 陳八尊臺今般旅順大連万西へ御旅行ニ付テハ既ニ私信ヲ以テ右各長官へ申進置候得共 当別封紹介書送付申上候 条御携帶相成候様致候 此段得貴意度 早々頓首

五月廿一日

徳富猪一郎殿

齋藤 實

封筒表 青山南町六丁目三十 徳富猪一郎殿 親展

封筒裏 海軍省 齊藤實

上村 彦野丞(1849~1916 嘉永2~大正5) 薩摩藩(鹿児島県)  
明治時代の海軍軍人(大将)。海軍兵学校卒。薩摩藩士。明治1年鳥羽  
伏見役に従軍。明治12年に少尉に任官、イギリスに留学。横須賀鎮守府  
参謀をへて、日清戦争には秋津洲艦長として出征。明治36年中将。日露  
戦争には第2艦隊長官。その後、横須賀鎮守府長官、第1艦隊長官、軍  
事参議官を歴任した。

大正5年2月17日付(封書・墨書)

拝啓 益御清祥被為に御坐奉忝賀候 陳八假不貞親政変並帝範軌国字  
解態々御患與を辱ふし御厚意感謝に堪へず候 不取敢右御禮申述へ度  
此二御坐候 勿々敬具

二月十七日

上村彦之丞

徳富猪一郎殿

封筒表 東京市京橋区日吉町民友社 徳富猪一郎様 御禮状

封筒裏 於鎌倉 上村彦之丞

小笠原 長生(1867~1958 慶応3~昭和33) 唐津藩(佐賀県)

唐津藩主小笠原長行の長男。明治6年に家督を相続。学習院、攻玉社を  
経て、明治17年に海軍兵学校に入学。卒業後、日進・天城・八重山など  
に乗艦し、明治27年には高千穂の分隊長として日清戦争に従軍した。戦  
後は軍令部に出仕し、日清戦史編纂委員を務めた。明治35年から浅間分  
隊長、千代田副長など海上勤務を経て、明治37年に軍令部参謀として日  
露戦争を迎える。日露戦争後も戦史編纂委員を務めている。その後も軍  
令部参謀や艦長などを歴任し、大正8年に中将で退役。昭和20年まで宮  
中顧問官を務めた。退役後は東郷平八郎の伝記や『撃滅―日本海海戦秘  
史』『日本帝国海上権力史講義』など多数の著書を執筆している。

昭和17年7月20日付(封書・墨書)

肅啓 御病中をも不願御面倒なる御願申上候處御叱もなく御許容なし  
被下候のみならず頂戴物まで仕り御芳志感銘に不堪候不取敢右御禮申  
上度如此御坐候 酷暑ノ程御加養一に奉折候 敬具

七月廿日

小笠原長生拝

蘇峰老臺 扉皮下

封筒表 東京市大森区山王 徳富猪一郎殿 侍史  
封筒裏 東京世田谷区代田二ノ六七六 小笠原長生

小笠原子爵の『撃滅』に就て(『日日』より) 昭和11年8月25日(徳富猪一郎記)

海軍中将子爵小笠原長生君は、旧唐津藩主小笠原長行、当時世間で明山公と称した  
る幕末政治家の長子である。子爵は乃父の文藻を遺伝して、我が海軍に於ける文章  
の達人である。若し他に其人を求めば、恐らくは故秋山真之提督であらう。小  
笠原子爵の文名は、其の少壮時代金波樓主人のペンネームによりて、我等は蚤とに  
承知している。同時に子爵は故東郷元帥に尤も親昵したる一人にして、凡そ事の東  
郷元帥に関するもの、細大となく君の宣揚、鼓吹に頼らざるものは無った。而して  
今尚ほ然りだ。頃ろ子爵の古稀の寿を迎えられたるに際して、其の全集刊行の挙あ  
り、其の第一として、本書は新装をもて出で来た。此れは実に海軍中の名文家た  
る子爵が、其の崇拜する海軍の軍神とも云ふべき東郷元帥の最大偉勲の一なる日本  
海海戦を叙したるもの。「撃滅」の二字は、東郷元帥が「誓つて露艦を撃滅して、  
宸襟を安んじ奉らむ」との奉答語より抽出したるもの。而して著者自身も亦た東郷  
元帥の下に、三笠艦の仕官として、其の左右に在りて、戦闘に従事したるもの。正  
さに是れ三拍子揃うたるもの。されば此書が如何に驚く可く、喜ぶ可き海戦史であ  
る可きかは、今更ら記者が喟々の讃語を呈する迄もあるまい。今ま試みに、其の一  
節を掲げんに、

東郷大將は、突然右手を真直に挙げ、颯と左舷の方に一振して、詰つと参謀長を  
見返つた。参謀長はその意を覺り。「艦長―取舵一杯!」と叫んだ。「エ、取舵  
にですか」「そうだ、取舵だ」いひも終らず、大將に向ひ、「長官―取舵に致し  
ます」打領いた大將は、会心の微笑を浮べ、依然として炯々たる眼光に、敵の動  
静を看守つた。

只だ此の無言の右手一振が、此の世界の海戦史に光輝あらしめたる日本海々戦全捷  
の楔子であつた。記者は親しく東郷元帥より此話を聞き、本書を読んで今更の如  
く、其の記憶を新たにした。

伊集院 五郎(1852~1921 嘉永5~大正10) 薩摩藩(鹿児島県)

明治・大正期の海軍軍人(元帥)。鳥羽伏見戦争では薩摩軍に参加。明  
治10年イギリスの海軍学校に留学、帰国後は参謀本部に入る。明治39年  
に伊集院信管を発明し、日露戦争で威力を発揮した。明治40年男爵、43  
年大将、大正6年元帥となる。

明治37年12月16日付(封書・墨書)

拝啓 陳者戦争ト経済ト題スル貴臺之書籍御贈与二預り深く感佩到候

右御禮申上度 勿々頓首

明治三十七年十二月十六日

徳富猪一郎殿

封筒表 徳富猪一郎様 親展

封筒裏 伊集院 五郎

伊集院五郎

財部 彪 (1867~1949 慶応3~昭和24) 宮崎県

明治・大正期の海軍軍人(大将) 海兵15期。海大。妻は山本権兵衛の長女。明治27年高雄分隊長、航海長。明治30年~32年イギリスに駐在し、明治37年大本営参謀を任せられ、明治40年以降は宗谷・富士艦長をへて第1艦隊参謀長に就任。昭和5年浜口内閣の海相として、ロンドン軍縮会議に若槻礼次郎とともに全権として出席、補助艦制限の条約に調印したが、条約反対派の攻撃の矢面に立った。同条約が批准された翌日に海相を辞任。

昭和9年2月1日付(封書・墨書)

拝啓 陳者先日ハ唐突無遠慮ナル御願申上候処直ニ願意御許容 昨日は懇ナル御批評ヲ賜リ御厚情之程厚ク深ク御礼申上候 不取敢以寸緒茲ニ得貴意候 勿々不尽

昭和九年二月一日

徳富先生 侍曹

財部 彪

封筒表 市内大森町山王 徳富蘇峰先生 侍曹

封筒裏 芝区白金三光町五一九番地 財部 彪

安保 清種 (1870~1948 明治3年~昭和23) 佐賀県

大正・昭和期の海軍軍人(大将)。海軍大佐・沢野種鉄の3男。安保清康の養子。明治33年軍令部副官となり、明治35年以降、朝日分隊長、須磨、八雲、三笠等の砲術長を歴任。日本海海戦では艦隊射撃を指揮。明治38年~41年イギリス駐在となり、帰国後、海大教官、第2艦隊参謀等の艦隊勤務を経て、イギリス大使館付武官となる。大正11年国際連盟海軍代表となり、艦政本部長、海軍次官、呉・横須賀両鎮守府長官を歴任した。昭和5年ロンドン条約問題で財部彪海相が辞任したあと、海相に就任し、部内対立の緩和に努力した。

昭和13年2月17日付(封書・墨書)

拝啓 陳ハ昨日柴田徳次郎氏ニ托シ特ニ御惠贈被下候 御近著皇道日本ノ世界化壹部正ニ難有拝受 ツイ先日御目ニ掛ツタ旧知ノ対英羅針盤ノ顔ナドモ見エテ何トナク懐シク夫レカラ夫レト最下面目ク最ト有益ニ一氣ニ読了 今更ナカラ文章教化ノ偉大サニ打タレ申候様ナ次第ソノ現実ニ処シテノ夫レモ此レモノ御教示一々感銘仕候 茲ニ御芳情ノ程 書中ヲ以テ取敢ヘズ御禮申上度 如斯ニ御坐候 敬具

昭和十三年二月十七日

蘇峰先生 座右

安保清種

封筒表 市内大森区山王二丁目二八三二 徳富蘇峰先生 親展

封筒裏 牛込区市ヶ谷富久町 安保清種

伊東 祐亨 (1843~1914 天保14年~大正3) 薩摩藩(鹿児島県)

明治時代の海軍軍人(元帥)。神戸の勝海舟の塾に入り航海術を学ぶ。薩英戦争に参加。維新後、創設期の海軍で春日・扶桑などの艦長となり、明治19年少将、明治25年中将に進み、日清戦争には連合艦隊司令長官。戦後海軍軍令部長となり、明治31年大将。日露戦争には大本営海軍幕僚長となった。明治39年元帥。陸軍の山県有朋とならぶ海軍の重鎮で薩摩閥の長老として海軍部内に強い藩閥勢力を培った。

明治43年3月8日付(封書・墨書)

拝啓 御清栄可被為涉大慶ニ存候 陳ハ過般於上野ノ公園ニ維新志士遺墨展覽記念会御開催ノ節ハ観覧券御送與被下候處當時は臥床中ノ折ニテ乍遺憾拝見ノ機ヲ失シ失望ニ存候處今回絵端書沢山ニ御惠與与被下難有感謝ノ至リニ候 爰ニ不取敢御禮申上度為其如此御坐候 早々敬具 三月八日 祐亨 拝

国民新聞社 徳富猪一郎殿 侍史

封筒表 国民新聞社 徳富猪一郎殿

封筒裏 芝車町 伊東祐亨

黒井 梯次郎(1866~1937 慶応2(昭和12) 米沢藩(山形県) 明治・大正期の海軍軍人(大将)。明治19年海軍兵学校卒。同26年海軍大学卒。日露戦争では、急遽編成された海軍重砲隊の指揮官として旅順要塞攻撃に参加。戦後は、ロシア公使館付武官、大正2年に練習艦隊司令官。横須賀工廠長、第3艦隊司令長官、舞鶴鎮守府長官などを歴任。大正9年大将に進む。

大正( )年5月25日付(封書・墨書)

拝啓 倍々御安奉拝賀候 昨日ハ於青山山會館最も有益にして興味ある御講演を拝聴いたし乾地ニ慈雨の心地仕候段 謹ミテ御禮申上候 文祿の役に朝鮮より将来いたし候書籍類に閱して御話中 老生郷里米澤藩に属する分 若干ハ現上杉伯爵家に於ても私蔵いたし居候へ共 多くハ旧藩學興讓館の書庫に蔵せしものを今ハ米澤図書館の小石造庫に格納致し居候よしニ御坐候 前年米澤へ御枉駕を願候折 或ハ既ニ御一覽相成候事歟とも存候へ共 御参考迄ニ函書目録中より抜粹して別紙進呈仕候 尤も右珍書目録中より朝鮮将来以外のものも別記致したる事ハ申上も無之候先ハ右御禮方々 如此御坐候 勿々頓首  
五月廿五日 黒井梯次郎

蘇峰先生侍史

封筒表 市外大森山王下 徳富猪一郎様 親展  
封筒裏 東京市芝区白金猿町六一 黒井梯次郎

## 2 陸軍

乃木 希典(1849~1912 嘉永2(大正1) 長府藩(山口県)

明治時代の陸軍軍人(大将)。吉田松陰に心服し、松陰の叔父であり、松下村塾の創立者玉木文之進の門に入る。慶応2年山県有朋らに従つて幕兵と戦う。明治4年陸軍少佐。西南戦争で軍旗を失ひ自決しようとし止められた。明治19年ドイツに留学して軍制・戦術を研究。一時休職して那須野で農耕生活を送るが、日清戦争に歩兵第1旅団長として出征。明治29年第3代台湾総督となるが、行政能力を發揮することができず、明治31年辞任。日露戦争には第3軍司令官として出征。旅順攻略を指揮したが、要塞は容易には陥落せず多くの死傷者を出すこととなり、指揮

官を交代した。戦争によつて乃木自身も二人の息子を亡くしている。要塞は児玉源太郎指揮官になつてから陥落した。出征中に大将となる。明治40年学習院院長となり生来の精神主義をもつて皇族子弟の教育にあつたが、明治45年明治天皇が没すると、妻静子とともに大喪の儀式当日自邸で殉死した。その精神主義がのち(軍神乃木)として喧伝された。

明治41年5月25日付(葉書・墨書)

拝啓 過日御書面ニ付早速吉田庫三氏へ申遣ニ候 同氏一昨夜参異候明日迄ニハ送越候筈 又拝借書説了候間 併せず差出延引ノ段御往迄如此候 略儀御免ヲ乞  
五月二十五日

葉書表 青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎殿

乃木希典

『乃木』序(第二人物隨録) 徳富猪一郎著

自分は乃木大将を知つてゐる。別に深き交際ではなかつた。併し尋常一樣でもなかつた。自分は乃木大将の盲信者ではない。大将も亦た人間だ。人間は決して完全無欠の者ではない。大将の如きは何れかと云へば直情徑行の人だ。其の瑕瑜相ひ掩はざるは勿論だ。特に自分は乃木大将の先輩、若しくは儕輩の人々とも親しく往來している者であつた。併し一切を乗除して、自分は乃木大将に敬服する者の一人である。大将の責任觀念、奉公觀念、即ち一言にして盡せば、赤心報皇の大精神には、隨喜渴仰するを禁ずる能はざる者である。此れと同時に、如何に大将が、躬行實踐の人であつたかを、自分は熟知している。大将は之を現代の世俗社会に於て見るよりも、寧ろブルタークの『英雄伝』中にも見る可き人物の一人であつた。大将を想へば、端なく羅馬の英雄シンシナタスに想及せざるを得ぬ。自分は大将の赤坂なる新坂町の邸を屢ば訪問した。そは旧著『吉田松陰』の改訂に際して、大将と打合せする事があつたが為めだ。事実就ても相談した。議論に就ても商量した。甚しきは文字に就ても、大将の意見を聴取した。乃木大将は、何事にかけても決して粗枝大葉の人ではなかつた。寧ろ綿密に過ぎたる如く想はれたる人であつた。大将の金言熟慮断行の如き、其の熟慮の二字が、最も意義あるものと信ぜらるゝ。自分の改訂『吉田松陰』校正刷には、大将が親しく精読して、其意見を加へてゐる。自分は文字の取捨に就ては、必ずしも悉く大将の意見に、服従しなかつた。所謂此れは和して同せずと云ふ可きものであらう。大将も亦た深く之を咎めなかつた。斯くて改訂『吉田松陰』の明治四十四年に出版せらるゝや、大将は其の若干部を購つて之を各所に分配せられた。乃木大将は亦た我が青山草堂に屢ば來訪せられた。そ

れは毎時早朝であった。大將は馬丁をも伴はず、其馬を門前の公孫樹に繋ぎ、玄關の靴脱の上に立つて徳富さんと呼ばれ、立ちながら話された。取次の者が、応接間に誘ふも、決して上らず、その為め予は寝衣の儘、顔をも洗はず、寝床より飛び出したことが一再ではなかった。(因に云ふ、自分も決して朝寝坊ではない。)而して時としては自ら贈与の書籍を携えられたことがあった。自分は乃木大將の愛読したる山鹿素行の『聖教要録』と『中朝事実』の原刊本を蔵している。故に之を大將の閲覧に供し、巻初之余白に題字を依頼した。大將は之を諾し、その文句の撰定を、予に需められた。予が彼是と思索している中に、大將は中耳炎にて、赤十字社病院に入院することとなり、その際使もて之を予に返却せられた。右の二書は、今尚ほ成篋室中に蔵している。

明石 元二郎 (1864~1919 元治1~大正8) 福岡藩(福岡県)

明治・大正期の陸軍軍人(大將)。陸士旧6期、陸大。明治9年上京し、安井息軒の門に入り、漢学を修め、陸大卒業後、明治27年ドイツに留学。日清戦争に近衛師団参謀として従軍し、日露戦争にはストックホルムで革命下のロシアの内情の諜報活動を行う。ドイツ大使館付武官を経て、明治41年韓国駐劄軍参謀長、明治43年韓国駐劄憲兵隊司令官、警務長官となり、朝鮮の義兵運動を弾圧。第1次世界大戦には青島戦に参加。大正7年台湾総督となり任地で病没。

明治43年10月18日付(封書・墨書)

拝啓 御無事御安着奉祝候 御滞韓中は失礼致候 其後総督之東上を見送り釜山より帰途茲に呈寸楮候 御意見之義即韓国都鄙諸新聞統一之件、総督にも申上候得共未だ嘉納せらるゝに至らず 要するに時機尚未だ熟せざる事と存じ候 追々発展之事に相成候様窃に奉期待候 将来に於ては必らず御意見之通統一せらるゝ事必要と存、其期之至るを待居候 汽車中之御高吟奉多謝候 誠に面白く拝見致 途中苦吟、小生も車中より敢て貴韻に廣く

忝併呑

千書万巻個中呑 八道文豪投筆奔  
豈為功名排曲学 熱誠濺在報君恩

乞正斧

十月十八日

素〔蘇〕峰先生玉榻下徳富先生 御直披

元二郎

封筒表 東京青山(赤坂区)、国民新聞社長 徳富猪一郎殿  
封筒裏 朝鮮大田駅旅館 明石元二郎

大山 巖 (1842~1916 天保13~大正5) 薩摩藩(鹿児島)

明治時代の陸軍軍人(元帥)。西郷隆盛の従弟。藩校の造士館および演武館に学び、文久2年島津久光の上京に従い、大坂滞在中、寺田屋事件に関係し謹慎した。文久3年薩英戦争では砲台を守り、その後藩命により江戸で砲術を学ぶ。戊辰戦争では薩軍第2番砲隊長。明治3年欧州に派遣され、普仏戦争を見学、翌年帰国後陸軍大佐。更にフランス留学3年。明治10年の西南戦争では司令官として活躍。以後長州の山県有朋とならび薩摩の総帥として陸軍に重きをなす。明治17年鳥尾小弥太・野津道貫・川上操六・桂太郎ら陸軍の俊秀を率いて渡欧、各国の兵制を視察。帰国後兵制の改革に努力。明治18年陸相。明治24年大將・枢密顧問官となる。日清戦争では第2軍司令官。その後、参謀総長・貴族院議員となり、日露戦争には満州軍総司令官。明治40年公爵。大正3年から没するまで内大臣。国葬となる。軍人として最高の地位にありながら、政治的野心なく、元老としても政界に影響力が少なく、陸軍内でも長州閥の優勢を許した。

明治( )年4月20日付(封書・墨書)

陽春ノ好時節 益々御壮栄奉惠候 陳者今回ハ結構ナル露凶事情預御贈與難有奉深謝候 扱別物ハ当茶園ニ於テ摘採ノ上調製シタル支那茶ト少々ノ角砂糖ニテ品粗ニ有之候得共 御親父様御壯康ニ被為涉仕候由ニ付御差上被下様致度呉々モ御依頼申上候 右御禮方々得貴意候 勿々頓首

四月二十日

徳富猪一郎様

封筒表

封筒裏

大山

巖

「大山公を弔す」(『第一人物随録』 徳富猪一郎著)

大山元帥の薨去は、我が朝廷をして、一の重臣を失はしめ、我が軍隊をして、一の老将星を失はしめ、我が国家をして、一の大人を失はしめ、我が社会をして、一の前代の活



ける、歴史を失はしめたり。是れ実に容易ならざる缺陷也。若し恐れながら明治天皇を以て、太陽に擬し奉らば、公は其の周圍に羅列する、群星の一たりし也。公の功業は、明治の史上に赫灼たり。乃ち武勲に於ては、十年の役、二十七八年役、三十七八年役、何れも公は実践に臨み、或は偏帥となり、或は総帥となり、其の殊勲を奏せり。而して事はよりも大にして、却て世に現はれざるは、公が帝國軍務の基礎を定め、之を大成したるにあり。是れ固より公人の力にあらず。行輩中の先進若しくは同僚としては、山県元帥あり、故西郷侯あり。其の後進若しくは部下としては、桂、川上、児玉、寺内等の諸將あり。然も若し帝國の軍務に就き、其の功勞者を個人に求めば、山県元帥を第一位とし、公を以て次位とするに、何人も異存なかる可し。桂、川上、児玉、寺内、其他の奇材、異能の士をして、克く其の所長に従ひ、其力を竭さしめたるもの、固より公が大體を持し、鈞衡を乗るや公平に、時務を見るや明白に、而して其の心休々焉として、能く容れ、能く断じ、能く行ひたるに由らずんばあらず。特に公の明治十七年の洋行は、我が陸軍の歴史に特筆す可き、一紀元を劃したるもの也。而して公が桂、川上兩人に向つて、互に戮協し、帝國陸軍の爲めに、貢獻す可きを論したるも、亦た此時にありとする也。如何に藩閥を攻撃しても、戊辰以來明治二十三年、帝國議會開設迄は、日本帝國の大政は、薩長人士の力にて運用し來りし也。戊辰前後には、西郷、木戸、大久保あり。明治六年より、明治十一年迄は、大久保あり。但だ大久保死後の明治政府は、頼ひに雄邁、老練なる岩倉公ありしも、政府の基礎は、幾回か動揺したり。然も此際に於て薩長が互ひに内に相ひ相聞きつゝも、外に向つて一致したる所以は、一方に伊藤、山県あり、他方に西郷、大山ありしに由らずんばあらず。蓋し故西郷侯は、天下無双の脇師也。或は伊藤公を相手とし、或は山県元帥を相手とし、時としては大隈侯を相手としてさへ、向ふ所可ならざるはなかりし也。大山公の役目は、西郷侯の如き、暗役にあらざりし也。然も公は蚤に薩長の協戮して、先輩の偉業を大成せざる可からざるを知れり。而して長派に於ては、文に於て伊藤を本尊とし、武に於て山県を本尊とするを知れり。人或は公の寡黙を稱す。然も公の無言は、他の雄辯よりも、有力なる雄辯たりし也。公が発言するにせよ、せざるせよ、如何なる場所に於ても公の在る所、必らず其の重を為せり。公は同僚としても、上長官としても、決して唯々、諾諾の好々翁にあらざりし也。公は胸中恒に見解あり、而して其の所信を一貫するに於ては、凛然犯す可からざるものありし也。

若夫れ公が家に賢夫人あり、良子女あり、家門雍穆にして清淨、所謂の模範的好家庭を作したるに到りては、現代の上流社会を通じて殆んど其匹罕なりと云ふ可し。唯だ此の一事を以てしても、亦た以て公の徳を頌するに餘りあり。嗚呼哀夫。(大正五年十二月十二日)

児玉 源太郎 (1852~1906 嘉永5~明治39) 徳山藩(山口県)

明治時代の陸軍軍人(大将)。戊辰戦争に参加。のち陸軍に入り、佐賀

の乱、神風連の乱、西南戦争に従軍して頭角をあらわす。明治20年、陸大校長としてドイツの軍制・戦術の移入紹介につとめ、明治24年ヨーロッパ視察。日清戦争には大本営参謀としても活躍し、功により男爵。長州軍閥の一人として重きをなした。明治31年台湾総督、明治33年第4次伊藤内閣の陸相、つぎの第1次桂内閣にも留任し、一時内相と文相を兼任した。明治36年内相を辞任して参謀次長に就任、参謀総長大山巖のもとで手腕をふるった。明治37年大将に累進して日露戦争に出征し、満州軍総参謀長として大山総司令官を補佐、智謀をうたわれた。戦功により子爵となり、明治39年参謀総長に就任、また南満州鉄道株式会社創立委員長となった。病没後、伯爵に昇叙された。

明治(32)年8月16日付(封書・墨書)

拝啓仕候 然れば上京中は毎度御来訪被下奉多謝候 彼之村上之一条も帰任篤と相談致候処 全一時之感情に御座候 固より格別之事も無御坐 愈一層勉強可致事に相決候間 御安心被下度 此場合知事之交迭等之事は余り好敷からずと存候際に付 小生に於ても又た本嶋之為めにも可賀事に御坐候 本嶋も又々暴風に会ひ候へ共 本年は昨年に比して雨量少なく 且第一期米は収穫後第二期は苗を下したる迄之処で 農作之害は皆無に御坐候間 損害意外に少なく仕合申候 随而民情も至極平穩に御坐候 林季成等之一派多少運動致居候様申居候へ共 是以小生は相信じ不申 併し専ら警戒は為致候 警戒之為め少賊を突き出し 世間体は却而騒敷相見候へ共 其実は藪蛇之傾き御坐候 雲林地も気に懸り候間 官吏を派出致取調候処 是以全く憶測之声のみ高く 当分は大事に立至り候形跡は更に無之 安心仕候 右御礼旁近況申述度如此御坐候。謹言

八月十六日 源太郎

徳富様侍史下

尚々天時御自重為邦家専一奉存候

封筒表 東京京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様 親展

封筒裏 台北 児玉源太郎

『児玉源太郎』に就て(『日々だより』徳富猪一郎記 昭和14年4月5日 宿利重一著『児玉源太郎』書評)

児玉大將は、実に一代の奇材であつた。未だ文武の全材、出では將、入りては相と云ふ、理想的の人物たらざるも、やゝそれに庶きものがあつた。防長の人物雲の如く、維新の風雲に際會して、中外に頭揚したるも、伊藤、山縣、井上の三尊以外に於ては、先づ桂、児玉の兩人を数へねばなるまい。我が皇國の陸軍は、上に山縣、大山あり、下に桂、川上あり、この四人は最も記憶せらる可きであるが、他の一人は乃ち児玉大將其人であつた。児玉大將は一人にして、桂、川上の兩人の未だ成すに違はず、若しくは成す能はざる所のものを、能く成就した。彼は軍政系統にも、軍令系統にも、而して更に一般行政にも、向う所ならざるなく、殆んど八面敵に當るの概があつた。桂公は曰く、「予が重忠に罹り、九死一生の堺に彷徨するや、児玉は自ら日本橋の魚河岸に出掛け、鮮魚を携え來りて、之を包丁に附し。予に喫せしめ。此の如くして予は生を回した。児玉の友情は死しても忘れ難し」と。大將の人間味は、其の接觸する所に溢れていた。

### 山県 有朋 (1838~1922 天保9~大正11) 長州藩(山口県)

明治・大正期の陸軍軍人(元帥)・政治家。松下村塾に学び、藩命によつて京都・江戸・薩摩などを巡り各藩の尊攘派志士と交わる。文久3年奇兵隊の軍監として活躍。戊辰戦争に従軍。維新後ヨーロッパに派遣され、帰国後、陸軍の軍制確立や徴兵令の制定などにあたる。明治6年陸軍卿となり、西南戦争では征討参軍となる。その後大久保利通、木戸孝允の死、板垣退助、大隈重信らの失脚によつて伊藤博文とともに明治政府の最高指導者となる。明治18年内閣制度による最初の内相となり、翌年は農商相を兼ね、この間内務官僚の支配権を確立した。明治21年第1次内閣を組織、その後陸軍大將となる。明治26年ロシアに赴き口バノフと日露協定を結ぶ。明治27年日清戦争では第1軍司令官、大本営監軍兼陸相、日露戦争では参謀総長となる。明治40年公爵となつて以後は表面に出ずして元老として政界を操縦した。終生政党を嫌悪し、官僚政治の保守に努めた典型的な藩閥政治家であつた。

### 明治 (37) 年12月15日付 (封書・墨書)

先日來屢芳墨を忝し多謝 如來諭旅順潛匿之戰閩艦は殆ど撃滅せられ我海軍之勢力を強し御前慶之至に候 猶前途遠慮不尠候 老生も大本營のみに消光し一步も其他に踏み出し不申 夫故内地之事情には甚迂遠千万 新聞も外国電報より外には東京便り位にて一読も不致御一笑可被下候 国民新聞之月曜日出板之紙数を増加被致度不堪希望候 余

事在面晤 草々 不尽

十二月十五日

蘇峰老兄硯北

雪のふりたる日よめる

静かなる窓の雪にも北支那のあら野の吹雪おもひこそやれ

昨日の大雪にて腰折一首供一笑 草々

封筒表 赤坂区青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎殿

封筒裏 小石川区芽城台 山県朋

### 山縣元帥(人さまさま)徳富猪一郎著

山縣の眞値を測定するには、餘りに時間と、空間とが接近している。彼の歴史的人物としての位置は、若干の年代を隔て、遠方より之を諦視せねば、其宜ろしきを得難い。然も今日に於て、全然緘黙するには、彼は餘りに偉大である。故に出来得る限りに於て、離隔の心意もて、聊か觀察を試みるであらう。一言にして云へば、彼は孝明天皇の末期より、明治天皇の全期を通じ、以て大正の御代に至る六十有餘年に亙る年代に於て、実に一個人として、最も多くの干係を、日本の國家と有したる一人であつた。八十五歳にて逝きたる彼は、年齢に於ても、申分がない。奇兵隊時代に於て、彼と同功一體の高杉晋作が、二十九歳にて死したるに比較すれば、彼は殆んど三倍の年齢を占めた。然も此の長き歳時が、殆んど一日も、天下國家と接觸なきは無かつたを思えば、彼が如き政治的生命の久遠あるものは、実に比類罕なりと云はねばならぬ。個人としての山縣は、長軀瘦骨の一老翁であつた。然も彼は伊藤の秀吉に肖たよりも、家康により能く似ている。家康は秀吉の評した如く、福祿円満なる大黒天であつた。然も山縣は直言すれば、貧相なる家康だ。然く貧相と云ふも、其の性格は、吾人をして家康を想起せしめずして禁む能はぬ。家康が偉大なる如く、彼も偉大だ。家康が抱擁力の大であつた如く、彼の抱擁力も決して小でなかつた。人は見掛けによらぬものだ。雅量と大腹の持主は、伊藤よりも寧ろ山縣であつた。彼の袋の口は極めて狭隘なるが如くして、其の奥は広く、且つ深かつた。剛も吐かず、柔も茹はずとは、彼の人事とに對する要訓であつた。

### 川上 操六 (1848~1899 嘉永1~明治32) 薩摩藩(鹿児島県)

明治時代の陸軍軍人(大將)。藩校造士館に学ぶ。戊辰戦争には藩兵分隊長として上京。明治4年親兵として再び上京、陸軍中尉となる。征韓論決裂後も官にとどまり、佐賀の乱・西南戦争に参加した。明治17年大山巖に随行して欧州兵制を視察。明治19年近衛第2旅団長、ドイツに渡

椿山莊主 朋

り兵制を研究。日本陸軍の兵制をフランス式からドイツ式に転換する事に参加。明治26年参謀次長。統帥・陸軍教育の充実に努力し、軍事情報収集に尽力した。日清戦争では大本営参謀として作戦を指導した。明治31年陸軍大将となり、参謀総長に任ぜられる。強硬な主戦派として有名。徳富猪一郎著『陸軍大将川上操六』（昭和17年）がある。

明治(27)年7月29日付(封書・墨書)

玉章拝誦 今日之善戦他日之大勝利吉兆なるべし 唯々御堪忍第一と奉存候 楮別封品物は有合にまかせ呈上仕候間 御笑留被成下候得ば至而幸候 先は貴酬のみ勿々百拜

七月廿九日

操六拜

徳富尊兄玉坐下

封筒表 徳富猪一郎様

封筒裏 川上操六

川上将軍(蘇翁感銘録) 徳富猪一郎著

予が先年石黒老子爵の病を訪うた時に、老子爵が予にいはるゝには『川上のことをよく知っているものは、今では予と君ばかりである。予も近くこの世を去るが、どうか川上の事は忘れずに後に伝えて貰ひたい』と。やがてこれが石黒老子爵の遺言となった。その後予は不十分ではあったが、「陸軍大将川上操六傳」を著して、些か石黒老子爵の遺言に報ゆることを得た。予が今こゝに語らんとするは、川上将を後世に伝えるためではない。唯、予の生涯に少からざる影響を與へたる將軍に對する感謝の情を表現するためである。予と將軍との接触は、明治二十七年、日清戦役の年から、明治三十二年五月將軍の死去まで、即ち將軍としては、四十七歳から五十二歳まで、予としては三十二歳から三十七歳まで、即ち六ヶ年足らずである。接触の時間としては極めて短い。併し予としては三十臺血氣最も盛の時であつて、この間の一年は、生涯にとつて或は十年二十年の値打があつたかも知れぬ。従つて五ヶ年半の歳月は、川上将と接触して得るところ最も多かつたと思ふ。大將は西郷従道の評した通り、唯の芋ではなかつた。薩摩人には概して二夕通りの型があつた。一は茫洋として、要領を得ざるが如くにして要領を得ている型と、一は俊敏にして、要領を得たるが如くにして要領を得たる型とがあつた。川上将は不得要領型ではなくして、得要領型であつた。一見この人は俊敏にして、智謀満ちが如く、才氣濺刺の人であつた。従つて大將に就いては様々の悪評が行はれ、予が國民新聞も、決して好意を表してゐなかつた。併し已にして東亜に風雲が捲き起り、やがては日清兩國が互に干戈を以て相見えんとするの氣運が目睫の間に迫り來つゝあ

るに際しては、新聞記者として何処よりも先づ川上将軍の所に駆込むより外はなかつた。さういふ場合には好きとか嫌ひとかいうわけには參らない。予は独り將軍から益を得たばかりでない。將軍周囲の人からも亦よく益を得た。將軍の部下は、実に多士濟々であつた。あらゆる陸軍の頭脳といふ頭脳は殆ど悉く將軍の部下に羅致せられてあつた。寺内元帥の如きも、当時は大佐であつたが、その系統はもとより山県系統であつたにせよ、仕事の上では川上将軍の配下であつて、予は將軍の紹介で相識を得た。その他田村怡與造・宇都宮太郎、明石元二郎などの俊秀は勿論である。また福島安正、神尾光臣などといふ人々もその通りである。前首相東條英機君の先考東條英教なども亦川上将軍の部下として識つた。將軍は學者ではなかつた。また學問の好き者でもなかつた。將軍は桂の如く自ら外國語をもちやなかつた。併し人を用ひることの巧妙なることに至つては殆ど無類といつてもよかつたらう。この点桂もなかなかさるものであつたが、到底將軍程の鮮やかさはなかつた。當時陸軍のブレーションは殆ど參謀本部に集まり、たゞ集まるばかりでなく、各々適材が適所に働いていた。外國の諜報などに至つては外務省などは到底及ばなかつた。而して將軍が人を使ふの妙に至つては、上は大臣、大將より、下は小使、給仕に至るまで、何れも皆欣然としてその用を辨ぜざるものはなかつたのである。

最後に、予が最も感銘に堪へなかつたことは、川上将軍が何時もいふことには、『神様の、仕事はともわれわれ人間の企て及ぶところではない。併し苟くも人間のする仕事ならば、彼も人間である以上、それだけのことはわれわれも必ずやり遂げることが出来る』と。これは恐らくは將軍の一生を貫くモットーであつたと思ふ。所謂古人が『舜何人ぞ、吾何人ぞ』というたのも、これと同じ意味であらう。この壮心、氣魄、これが將軍の大を齎した所以であり、同時に誰人も忘るべからざる心意気でもある。

寺内 正毅(1852-1919 嘉永5-大正8) 長州藩(山口県)

明治・大正期の陸軍軍人(元帥)・政治家。長州藩御桶隊で山田顕義、品川弥二郎らの指導をうけ、のち整武隊に入り、箱館戦争(五稜郭の戦)に従軍。維新後、大村益次郎に認められ、大阪兵學寮に入った。明治10年の西南戦争では田原坂の戦いで右手を負傷し、その後軍政面で活躍。明治16年駐仏公使館付を命じられ、帰国後は、明治31年初代教育総監、参謀本部次長など陸軍の要職を歴任し、桂内閣、西園寺内閣では陸軍大臣を務めた。明治39年大將に昇進。明治43年朝鮮併合が行われると、初代朝鮮総督として武断政治を行った。更に伯爵にのぼり、大正5年元帥となり、同年10月大隈内閣のあとをうけ組閣。シベリア出兵を強行し、軍備拡張、大衆課税の増徴、言論弾圧を行い、その超然主義的な態度は

軍閥政治、(非立憲内閣)と世論の批判をうけ、大正7年米騒動によって内閣は崩壊した。

明治(35)年9月11日付(封書・墨書)

拝復 態々御手面被下拝読之榮を得申候 益御清祥奉賀候 御書中二年兵役に対する意見発表云々御忠告之次第御厚情拝謝之至に奉存候 就ては甚勝手ケ間敷義に御坐候得共 自然御足労被下候事相叶候得ば其序を以委曲御相談相願度 材料も少々相集中に御坐候 御分別御依頼申度 旁右御願旁申試候草々拝具

九月十一日

徳富君侍史

正毅

封筒表 府下青山南町六の三十 徳富猪一郎殿

封筒裏 永田町一 寺内正毅

一戸 兵衛(1855~1931 安政2~昭和6) 弘前藩(青森県)

明治・大正期の陸軍軍人(大将)。東奥義塾を経て、明治7年陸軍兵学校に入学。西南戦争、日清・日露戦争に従軍した。日露戦争では金沢第6師団長として旅順攻略戦に参加し、同攻撃中唯一の戦果をあげた。第1師団長・教育總監を歴任し、大将に昇進。予備役となつてからは、学習院院長、明治神宮宮司、帝国在郷軍人会会長などを務めた。

( )年( )月( )日付(封書・墨書)

拝啓 秋冷ノ砌 弥御清康奉賀候 陳者乍卒然 小生同郷人畑中与惣吉氏ヲ御紹介仕候 御面談ノ上一応所見御聞取被下候得バ難有奉存候 実ハ小生も初会ノ事ニテ其素性等承知不致御紹介も如何ト存候得共遠方より遥ニ上京且相当世ニ馴レ候人ト被認其上確ナル通信大臣ノ機関長ノ免状ヲ所持致居候為メ萬更ウロン者トモ無之存 御紹介申上候次第ニ付左様御承知被下度書外拜答之際陳言可仕候 頓首 兵衛拝 徳富蘇峰先生 楊下

封筒表 徳富猪一郎殿 煩親展

封筒裏 渋谷区北谷四十七 一戸兵衛 畑中氏持参

「軍人らしき軍人一戸将軍」(『人物景観』徳富猪一郎著) 予が陸海軍人の人物を知る、決して鮮くない。その中に於て、文武の道に通じ、真に軍人らしき軍人として、尊敬したる一人は、実に一戸将軍であつた。一戸将軍は津軽一寒士の家より出て、何等の藩閥とか、学閥とか、人閥とか、所謂閥なるものに恵まれずして、自ら運命を開拓し、明治九年二十二歳にして、陸軍少尉試補となり、大正四年六十一歳にして、陸軍大将に任じ、他の援引を俟たず、その極位に達した。将軍は如何にも木訥にして、野人の風貌を帯んでいた。然も其の見識と、其の思慮と、其の操守と、其の信念とは、卓然として、凡俗の上に超越していた。彼の如きは武人の典型たるばかりでなく、実に典型的な日本男児と云ふ可きだ。

野津 道貫(1841~1908 天保12~明治41) 薩摩藩(鹿児島県)

明治時代の陸軍軍人(元帥)。戊辰戦争に従軍。明治4年陸軍少佐、明治7年大佐に任官。佐賀の乱・西南戦争などに従軍。明治11年大山巖陸軍卿の渡欧に随行して軍制を視察。明治18年伊藤博文に従つて清国に渡る。日清戦争時は第5師団長、第1軍司令官として活躍、大将に昇任した。以後、近衛師団長、教育總監などを歴任。日露戦争時は第4軍司令官となり満州軍の中央軍として活躍。明治39年元帥、翌年に侯爵となる。

明治37年10月19日付(封書・印刷)

子爵高島鞆之助妻春子事兼て病気の處養生不相叶本日前二時逝去致候間此段御通知申上候 葬送の儀は来る廿一日午前九時麹町区紀尾井町自邸出棺青山墓地に於て神葬式執行致候也 明治三十七年十月十九日

親戚

出征中 伯爵 野津道貫

伯爵 吉井幸蔵

樺山資英

徳永重康

封筒表 赤坂区青山南町六ノ三〇 徳富猪一郎殿

長岡 外史(1858~1933 安政5~昭和8) 長州藩(山口県)

明治・大正期の陸軍軍人(中将)・政治家。陸士旧2期。陸大。陸大1期生として卒業後参謀本部に入り、日清戦争に大島混成旅団参謀として

従軍。日露戦争には大本営で参謀次長をつとめる。明治42年陸軍中将となり、陸軍省軍務局長、臨時軍用気球研究会の初代会長を兼務した。大正5年には予備役となる。大正13年総選挙に山口県から出馬して衆院議員となる。新潟県高田の第13師団長時代、部下の将校にオーストリアのレルヒ少佐から日本で初めてスキー技術を学ばせ、民間にも伝えた。草創期の日本航空界の発達にも尽くした。長く伸ばした「プロペラ髭」は有名であった。

明治44年7月10日付（封書・ペン字）

暑気頃日相加ワリ候處 筆硯益御清祥奉拝賀候 陳ハ兼テ一寸御話致し候様にも相覚へ候口後物語別便にて差出候 著者当時ノ口議ナル口口家ト相見へ候 御清暇御一覽被下度候 御用済御返し被下度候 勿々頓首  
七月十日 長岡外史

蘇峰先生 硯北

封筒表 東京市京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様

封筒裏 越後高田 長岡外史

上原 勇作（1856〜1933 安政3〜昭和8） 日向国（宮崎県）

明治・大正期の陸軍軍人（元帥）。秋山好古と同期の陸士旧3期生。明治12年工兵少尉となる。明治14年〜18年フランスに留学し、工兵関係の近代的知識を学ぶ。帰国後、陸士・陸大の教官や参謀本部員などを歴任。日清戦争には第1軍参謀、日露戦争には第4軍参謀長として従軍した。戦後師団長を経て、第2次西園寺内閣の陸相となったが、2個師団増設を強硬に要求して、大正1年12月単独辞職して同内閣を瓦解させ、大正政変のきっかけをつくった。大正3年教育総監、大正4年大将、大正10年子爵、元帥。大正12年参謀総長として一人で陸軍の3長官を兼任した。薩摩閥の長老として、山県有朋没後における陸軍の重鎮となり、のちには〈宇垣一成閥〉と対立した。日本における工兵の創始者。

大正14年2月20日付（封書・墨書）

尚々並木君来訪ノ折ハ取込最中ニテ甚ダ失礼仕候 旨折手以って可然御

伝声希度候

筆硯益御多祥珍重口奉候 陳ハ先日ハ国民小訓一部御恵與被下一気ニ卒読仕候テ国民之小訓ナラデ国民必読大訓ト存シ候 読去テ瞑想盡時國體之尊厳ト我々ノ本分トヲ今更ノ如ク痛感シ仁胸頓ニ爽快ヲ覚ヘ申候方今異端人心ヲ惑スノ秋此好著ハ以テ破邪ノ利剣タルコシ恐クハ天先生ヲシテ言ハシムルモ坎ト存ゼラレ候 真ニ青年将校並ニ等ト在郷軍人諸氏之好伴侶ト被存候 大ニ知友之間ニ 吹竽致度存居候 先ハ不取敢御礼申上度 如此御坐候 餘ハ抹光萬々可申上候 謹言  
二月二十日 上原勇作

徳富先生梧右

封筒表 市外大森町山王 徳富猪一郎様 御禮

封筒裏 大井町鹿島谷 上原勇作

本郷 房太郎（1860〜1931 万延元〜昭和6） 篠山藩（兵庫県）

明治・大正期の陸軍軍人（大将）。旧3期。明治12年陸軍士官学校卒業後は、陸士教官兼生徒隊長として士官教育に携わる。日露戦争では歩兵第42連隊長として出征。明治42年軍事軍政の研究視察のため、欧州各国に派遣され、軍政畑で能力を発揮して寺内正毅に重用された。その後は再び部隊指揮に戻り、第17師団長、第1師団長、青島守備軍司令官、軍事参謀官を歴任し、大正7年陸軍大将に昇進。退役後は宮内省御用掛、大日本武徳会会長などを務めた。また郷里のためにも力を尽した。秋山好古は士官学校の同期生。

大正7年8月8日付（封書・墨書 軍事郵便名刺に文章を記す）

謹祝御健康 貴著支那漫遊記御恵贈被下難有拜受 乍略儀右不取敢御禮のみ申上度如此二時下炎暑御自愛専要奉願上候 勿々

徳富先生

封筒表 東京青山南町六ノ三〇 徳富猪一郎殿

封筒裏 青島 本郷房太郎

井口 省吾（1855〜1925 安政2〜大正14） 駿河国（静岡県）

明治・大正期の陸軍軍人（大将）。陸士旧2期。陸大。明治20年から23年までドイツに留学。帰国後、陸大教官。日露開戦時の参謀本部総務部長、ついで満州軍参謀、のち軍事参謀官となった。

大正12年8月22日付(絵葉書・ペン書き)

東京府下荏原郡大森町 徳富猪一郎殿

過日御来沼ノ節ハ甚タ粗略多謝々々久方振りニ御壮容ニ接シ且つ御高話拝聴近頃ノ快事ニ有之候処 却テ御芳詞ニ與リ恐縮ノ至ニ不堪右方ヨリモ御挨拶申上度 如斯御坐候 草々再拜

大正十二年八月二十二日

鮎堂三桑巢於テ 井口 省吾

(葉書裏 三島名勝・鮎壺の瀧より富士山を望む風景)

幣巢庭前ヨリ眺メタル景色ニ候 当地再御巡遊ノ折モ候ハバ一度此ノ天然ノ景勝ヲ御観評願度候幣巢ハ三島駅ヨリ三四町ヲ出テズ候

松川 敏胤(1859~1928 安政6~昭和3) 仙台藩(宮城県)

明治時代の陸軍軍人(大将)。二松学舎を経て、明治15年陸軍士官学校卒。明治20年陸軍大学校卒。明治26年から28年までドイツにおいてプロシア陸軍の作戦用兵術を修得。日清戦争末期に帰国し台湾鎮圧戦に参加した。陸軍大学校教官などを経て、明治32年、再び公使館付武官として渡独。日露戦争直前の明治35年に、参謀本部第1部長となり児玉源太郎次長と共に対ロシア作戦の策定に当たり、開戦後は児玉が満州軍総参謀長に移るとともに同軍作戦主任参謀に就任して、奉天会戦などの主要作戦に知略を尽くした。戦後は、第10師団長、東京衛戍総督、朝鮮駐屯軍司令官などを歴任。大正7年大将に進んだが、陸軍の中樞に座ることなく大正12年に予備役編入となった。

大正( )年12月22日付(絵葉書・墨書)

市内青山南町六丁目 徳富蘇峰先生 侍史

十二月廿二日再拜先達テ者近世国民史耆冊御惠贈被下難有頂戴 尙説可致此ニ作遅延 御禮申上候 不宣 下渋谷一七八 松川敏胤

福島 安正(1852~1919 嘉永5~大正8) 松本藩(長野県)

明治期の陸軍軍人(大将)。慶応1年江戸でオランダ式兵法を学び、維新後、大学南校に学ぶ。明治6年司法省に入り、翌年陸軍省に移る。中国・朝鮮関係の官職を経て、明治20年ドイツ駐在武官としてベルリンに赴任。明治25年帰国に際し、単騎でロシア・シベリアを1年4ヶ月かけて横断し、シベリア鉄道建設上京を視察した。日清戦争では大鳥圭介

駐韓公使を動かして韓強硬論を唱えた。義和団事件には派遣軍司令官として活躍。日露戦争では満州軍参謀として手腕を揮う。大正3年大将に進み、退官した。著書に『伯林より東京へ単騎遠征』(1918年)がある。

大正6年8月14日付(絵葉書・ペン書)

東京京橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峯様

軽井澤 福島安正 八月十四日

拜啓 剛健旅行ノ第一回都合ヨク終了 御高配奉拝謝候 詳細ハ守武、佐藤両君ヨリ御聞取ノ事ト恐察仕候 尚ホ続々此種ノ旅行実施セラレ幾分ナリトモ青少年ノ意氣ヲ激励シタキモノト切望仕居候 宜シク御配慮奉願候

白川 義則(1868~1932 明治1~昭和7) 松山藩(愛媛県)

明治・大正・昭和期の時代の陸軍軍人(大将)。陸士1期、陸大。陸大在学中、日清戦争に出征。明治31年陸大卒業後近衛師団参謀となり、日露戦争には歩兵第21連隊大隊長として出征した。大正2年以降、中支那派遣隊司令官、人事局長、陸軍次官をへて、大正12年関東軍司令官に就任。田中義一内閣の陸相を務め、大正15年軍事参議官となる。昭和7年上海事変に際し、上海派遣軍司令官に就任したが、停戦後の同年4月29日上海での天長節記念式場で朝鮮人民族主義者尹奉吉の投じた爆弾により重傷を負い、5月死亡した。

昭和3年11月1日付(封書・印刷封筒なし)

拜啓 来十二月二日午前東京市外代々木練兵場ニ於テ大禮觀兵式御奉行可被為在候ニ就テハ陪觀可被差許候條御参會相成度此段御案内申上候 敬具 陸軍大臣 白川義則 昭和三年十一月一日

### ③ 政治家・外交官

伊藤 博文(1841~1909 天保12~明治42) 周防(山口県)

明治時代の指導的政治家。百姓林十蔵の子、萩の足輕伊藤直右衛門

の養子となる。幼名利助、のち俊輔、号・春畝。松下村塾に学ぶ。文久3年井上馨らとひそかに渡英した。四国連合艦隊の下関砲撃の報を聞いて帰国、列国と講話を結ぶのに尽力。維新政府の成立に際して参与・外国事務局判事・大阪府判事・兵庫県知事などを歴任。明治4年岩倉使節団の副使として欧米を視察。帰国後は征韓論を制圧する。大久保利通の死後は政府部内に地歩を固め、「明治14年の政変」により対立者大隈重信を政府から追放し、最高指導者となった。

明治15年憲法取調のため渡欧。プロシア憲法を学んで帰国。華族制度・内閣制度の創設、大日本帝国憲法・皇室典範の制定・枢密院設置など天皇制確立のため努力した。明治18年内閣制度創設とともに初代総理大臣となり、また枢密院議長として政治を運営した。明治25年、第2次内閣を組織、行政管理・条約改正・海軍拡張を行い日清戦争を強行。明治31年の第3次内閣は憲政友会の反対にあい半年で崩壊。その後政友会組織の必要を感じ、明治33年立憲政友会を組織し総裁となる。この年、第4次内閣を組織したが翌年辞職。3度枢密院議長となる。日露戦争後、明治39年日韓協約を結び、初代韓国統監となり併合強行への第1歩を踏み出した。明治42年満州視察と日露関係調整のため中国へ渡る際、ハルビン駅頭で朝鮮独立運動家安重根に暗殺された。

明治35年6月23日付

拝啓 益御清適奉賀候 陳は明日午後五時赤坂三河屋に而小集相催候間、御閑職に御坐候はゞ御來車被成下度奉待候。草々敬具

六月廿三日

徳富猪一郎殿

封筒表 赤坂区青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎殿  
封筒裏 明治卅五年六月廿三日 侯爵伊藤博文

博文

「朗らかな政治家・伊藤公」(『蘇翁感銘録』 徳富猪一郎著)

伊藤と親しく接してみれば、如何に割引しても、当代第一流の政治家であるといふことは許さねばならなかった。第一、至誠国に許すの志士の気分は、維新以来少しも変わっていない。国家の法度典礼にも頗る通暁している立派な立法者、といふよりも制法者の資格がある。世界の大事にも能く通暁した第一流の外交家といふこと

も出来る。また古今の成敗、東西の治乱にも通じて、識見も卓抜である。品行放縱であつたらうが、彼は寧ろ大びらにそれを人の前にぶちまける風であつて、人の知らぬところで、或は人に隠れて、いろいろの醜行を逞しくするものに比べれば、寧ろ淡泊と言ふことも出来る。少くともこの点に於ては伊藤は偽君子ではない。また聊か弱腰のところもあり、面倒であれば自ら身を以てその外に飛出す癖もあるが、必ずしもそれが横着とか臆病とかといふこともできない。彼は常に小早川隆景を理想の人物として、その遠謀深慮に私淑していたが、時としては一書生と口角泡を吹いて議論を闘はすることもあり、予は親しく伊藤が靈南坂上の帝室制度調査局に於て、赤毛布を板の間に敷き、その上に坐つて護衛の警部と鳥鷲を闘わしているのを見たこともある。

陸奥 宗光(1844~1897 弘化1~明治30) 紀伊藩(和歌山県)

明治時代の外交官。15歳のとき江戸に遊学、その後京都に行き勤王運動に参加。慶応3年脱藩し、陸奥陽之助と称して坂本龍馬の海援隊に加わった。維新後、外国事務局に勤め、神奈川県令を経て、明治5年地租改正局長となる。明治7年薩長閥の専横に反対して職を辞すが、翌年元老院議員となる。西南戦争の際、林有造・大江卓ら土佐派と反政府の挙兵を企てたとの理由で禁獄5年に処せられた。明治15年赦免され、明治16年から明治19年欧米諸国に留学、帰国後外務省に入る。明治21年駐米公使、明治23年山県内閣の農商務相、明治25年伊藤内閣の外相となる。明治27年イギリスとの間で条約改正を実現し、日清戦争の遂行に精勵し、下関条約では全権として活躍した。伯爵。

明治(一)年2月5日付(封書・墨書)

舌代

少々御相談仕度事有之候間、甚恐入候得共明朝(十時比迄に)鳥渡鹿鳴館へ御入來被下間敷哉

二月五日

徳富兄

封筒表 民友社 徳富猪一郎様  
封筒裏 鹿鳴館 陸奥宗光 乞貴答

宗光

陸奥宗光(『我が交遊録』 徳富猪一郎著)

予が陸奥に接したのは、明治十九年の夏、彼が下谷根岸の金杉に住したる時代であ

つた。予は確かに記憶せぬが、多分島田三郎の添書で、彼を訪たと思ふ。当事彼は仙台の獄を出て、それより洋行し、帰来、弁理公使として、井上大臣、青木次官の下に、政務局長の仕事をしていた。彼は維新以来多くの履歴の持主であったが、如何にも若々しき気分が満ちていた。当事彼は四十三歳、予は二十四歳であった。彼は予の顔をつづく見て、突然『君の家は熊本県の南端薩摩境の水俣であらう』といふから、『その通り』と答へたところ、彼は語を継いで『君の家はよく知っている。君の親は勿論、君の姉なども知っている』と云った。話はそれからそれと飛んで、それ以来予は陸奥と親しく往来することになった。実を言へば、予て陸奥に就いては吾父から聴かされた、相当の予備知識を有つていた。併し多分当人は忘れているであらうと思ひ、又た忘れなくとも、今更ら古き話を持出すこともないと思つて、黙つていたのであるが彼の方から斯く話し掛けられては、此方でもその儘それを肯定するの外なかつた。彼の容貌はなかなか立派であつたが、どこやら狼顔、豹頭と云ふべき印象があつた。予が明治三十年六月外国から帰朝する時には、彼は既に病臥の人であつた。而してその病漸するを聞き、予は西ヶ原の彼の屋敷に見舞に赴いた。併し岡崎邦輔などの意見で、『折角見舞はれたが、今更君が面会しては、病人が興奮して、いよいよ病勢を昂進せしむる虞があるから、どうぞ遠慮してくれ』とのことであつて、予も餘儀なくその儘立歸つた。後で聞けば『徳富に逢へば一議論せねばならぬ。徳富ほどの譯の分つた漢が、撰夷家など、一緒になつて、騒ぎ廻るなどは怪しからぬことである』と云つていたさうである。それは予が六派連合の仲間の一人として、彼の外交政策に反対した為であらうと思ふ。何れにしても最後に今ま一度面会して見たらば、互に意思の疎通も出来たであらうと思ふが、それが出来なかつたことは、彼としては兎も角も、予自身に於ては甚だ遺憾に思つてゐる。

高橋 是清(1854~1936 安政1~昭和11) 江戸

明治・大正・昭和期の政治家・財政家。幕府の御用絵師川村庄右衛門の子。仙台藩士高橋是忠の養子となる。ヘボンの私塾で学び、慶応3年に藩留学生として渡米したが、欺かれて奴隷に売られ艱苦を嘗めた。翌年帰国し森有礼の書生となる。大学予備門で教えた。教え子に正岡子規、秋山真之がいる。明治20年初代特許局長に就任し、日本の特許制度を整えた。明治22年銀山開発のためペルーに渡るが失敗。明治25年総裁川田小一郎に認められて日本銀行に入行、明治32年副総裁となる。日露戦争中から戦後にかけて13億円の外債募集に成功した。明治38年貴族院議員に勅選され、明治39年横浜正金銀行の頭取兼任。明治40年男爵。明治44年日銀総裁。大正2年第1次山本権兵衛内閣の蔵相、大正7年原敬内閣

の蔵相となり、積極財政を推進。大正10年原首相暗殺後首相兼蔵相、政友会総裁となる。大正13年官職と爵位をすてて、第二次護憲運動の先頭にたち、代議士に初当選。昭和2年には田中義一内閣の蔵相として金融恐慌の收拾にあたる。満州事変後、3内閣の蔵相として軍需インフレ政策を推進し大恐慌の破局から日本資本主義を救つた。昭和11年二・二六事件で暗殺。

大正12年6月12日付(席札裏に鉛筆で書込み)  
蘇峰学人の恩賜賞を授与せられたるを祝ひて  
身に余る うれしさつつむ 夏衣 茜庵  
席札表 高橋様

注：大正12年6月12日、帝国ホテルに於いて、清浦奎吾、後藤新平、野田大塊らの主唱で開かれた、蘇峰の学士院恩賜賞受賞祝賀会の席札の裏に書いた祝いの短歌。

加藤 拓川(本名・恒忠)(1859~1923 安政6~大正12) 松山藩(愛媛県)  
明治・大正時代の外交官・政治家。伊予松山藩の儒学者・大原有恒の三男。拓川の姉・八重は正岡子規の母。明治9年司法省法学校入学。明治12年同校を退校後、中江兆民の仏学塾に学ぶ。明治13年廃絶していた親戚の加藤家を興し加藤姓となる。陸羯南とは司法省法学校同期で、子規を羯南に紹介した。明治16年フランス公使館勤務となった。明治35年ベルギー特命全権公使を勤める。明治40年に万国赤十字会議全権に就任したが、政府側と対決して辞職、衆議院に立候補、当選した。のちに大阪新報社長に就任。大正11年貴族院議員になり、パリ講和会議に随員として出席。大正11年松山市長に就任。

明治30年( )月5日付(封書・ペン書)

先夜ハ依例大尉独籍□□ Marinoniより只今別紙ノ通り電箋□□尋入御覽候署名者Nishaudと申ハMarinoniの婿にて 活版器械一切を擔當せる者に存し候ゆえ御待受可申際申来候故御面會の上 小生より宜



敷謝辞御通致被下ハ八幸甚ニ存候 草々頓首  
徳富先生  
五日午前

加藤恒忠拝

「加藤拓川遺稿」(「日日」より) 昭和6年4月12日 徳富猪一郎著

伊予の松山は、大藩ではなかつたが、その割りに人材が輩出した。及ち故拓川加藤君恒忠の如きも、亦た其の一人に数える可きであらう。記者は親交と云う可き程ではなかつたが、聊か其の面目を知つて積りだ。今や其の遺稿を見て、再び翁と相見るの心地がする。拓川翁が外交官として、新聞記者として、貴衆両院の議員として、将た最後に其の郷里の松山市長として、それぞれの事歴に就ては、今ま逐一之を物語る必要はあるまい。記者の尤も嘆嗟するは、其の垂死の際の交友に与へたる書簡だ。其の大正十二年三月七日付、尾崎敬義氏宛にて、「既に半ヶ月余(二月十九日より)絶食絶飲ゆえ、大分衰弱致候。若今日にも水の一杯も通れば、有望なれど、さなくば数日中に弥陀仏なるべし。六十五歳となれば、死んでも僭越に非ざるべし。」如何にも拓川翁の云いそうな言葉だ。僭越の二字尤も妙。大正十二年三月十六日付、中田雪莊君宛に曰く、「僕絶食絶飲二十六日、於茲而今猶生存亦仙中之人乎。シカシ仙も俗仙と見へ、マダ無心の境に至らず。金や酒色は欲しくないが、世事を忘れること能はず、御一笑く」是亦た翁其人の口吻が、其儘紙上に活動している。其の絶筆とも云ふ可き、大正十二年三月十七日付、西園寺公宛の長文は、実に死生の渡船場に於ける翁の心境を描き出して、餘蘊なきもの。而して其の海岸に新築の小荘に「浪の家」の命名をなし、其の扁額の揮毫を請ふなど。殆んど「生死大事」を、全く閑抛し去るの趣あり。人たゞ翁を以て一個の奇矯才子と做す。然も其の真骨頂の、別に存する所、此に於て其の片影を見る可きであらう。

桂 太郎(1847-1913 弘化4-大正2) 長州藩(山口県)

明治時代の政治家・陸軍軍人(大将)。文久3年馬関戦争に参戦して以来、軍人として成長。戊辰戦争には奥羽各地を転戦。明治3年兵制研究のためドイツに留学、明治6年帰国、翌年陸軍歩兵大尉。明治8年ドイツ駐在武官。ドイツの軍政の調査・研究に従事。明治11年に帰国後、山県有朋・大山巖を補佐し陸軍の兵制・官制の改革を行い、近代的軍隊の確立に努力した。明治19年陸軍次官。日清戦争では第3師団長として出征。戦後子爵。第2代台湾総督、東京湾防禦総督を経て、第3次伊藤内閣の陸相となり、大隈・山県・伊藤各内閣でも留任した。その後西園寺公望と交代で首相をつとめ(桂園時代)、日英同盟締結、日露戦争、日

韓併合などを主導した。元老として内大臣をつとめたのち、再び首相となるが、憲政擁護運動により退陣した。

明治38年9月5日付(封書・墨書)

本日午前以来之都下之情勢遺憾千万なり 午後に至り漸く警察之力不足之感ある故 先以東京衛戍惣督之権限に而取り得らるべき丈け之所置を取らせ居候 明日に至れば更に嚴重之所置に出で 政府の威厳をして遺憾無きに至らしむるの決心なり 右御答迄 且つ社員諸君之勇猛なる決心を承知し不堪感激候也

九月五日

太郎

徳富君侍史

封筒表 徳富猪一郎君

封筒裏 太郎

桂 太郎(『蘇翁感銘録』徳富猪一郎著)

予は桂公とは予の最も油の乗つていた期間、即ち明治三十四、五年から大正の初めまで十ヶ年餘、清友として極めて親しく交際した。併し正直のところ、予は桂の門下生でもなければ予分でもない。また師とか先輩とか仰いだ人でもない。要するに清友に外ならない。併し清友としての桂公についても、また学ぶべきところ少なかったと思う。今茲で予が語るの、単に予の眼に映じたる公の美點、長所である。決して桂その人の評論ではない。予は今から三十七、八年の役を追想する毎に、實に桂公は偉かつたと思ふ。その人格とか、その襟度とかについて言ふのではない。その政治家としての手腕は、明治時代を通じてもその比類を見出すことはなかなか難いと思ふ。いふまでもなくまづ日露戦争に引張つて行くまでが容易なことではなかつた。何としても日露戦争の第一巻は日英同盟であつた。然るにその日英同盟には伊藤、井上等の大巨頭が、正面反対とはいはぬが、気が進まなかつた。何れかといへば、彼等は寧ろ日露同盟をして、干戈に訴へずして日本の東亜に於ける地位を保全せんことを考えた。而も伊藤、井上の兩人は、桂にとっては先輩であるばかりでなく、恩人でもある。それを向ふに廻して争ふといふことは、とても出来得べきことではない。然るにその難関を、若干の摩擦はあつたとしても、とにかく切抜けていふこと、決して並大抵のことではない。更に日露開戦となつては足らぬものづくしである。何よりも金が足りない。兵器が足りない。軍艦が足りない。大砲が足りない。船舶が足りない。兵員が足りない。この足らぬものづくしの間に居つて、あらゆる苦心をなして、遂にその艦を下さずにうまくやつて行

ったことは、驚くべき手腕であるといはねばならぬ。世間では往々、桂は恰も水陸両棲動物であるが如く、山縣の子分でもあり伊藤の子分でもあるというが、予が観るところによれば、寧ろ桂は伊藤と山縣とをわが手本とし、兩人の善き所は努めてこれを学び、兩人の欠點は努めてこれを避け、而して山縣ならず、伊藤ならず、その間に公は公自身の特色を持たんとしていた如くである。いはば山縣は山の如く峙ち、伊藤は海の如く廣かつたが、桂はいはば支那の揚子江であるかの如く、濁流滔々として、西に向つて流るゝや、東に向つて流るゝや、ちよつと判らぬくらいに緩慢さで流れているが、併しその内には何もものを包容し、而してやがてはその目的たる海に流れているといふような類と観て差支へあるまいかと思ふ。

栗野慎一郎(1851~1937 嘉永4~昭和12) 福岡藩(福岡県)

明治・大正期の外交官。ハーバード大学留学後、外務省書記官・取調局次長から逋信省に転じ、逋相秘書官や東京郵便電信学校長を歴任し、再び外務省に戻る。明治27年からアメリカ兼メキシコ・イタリヤ・フランス兼スペイン各国公使に任ぜられ、明治35年からロシア兼スウェーデン公使としてロシアに赴任。日露戦争開戦直前まで外交交渉に尽力した。明治39年から明治44年までフランス大使をつとめて退官。明治45年子爵。昭和7年枢密顧問官に任ぜられた。

( )年( )月( )日付(封書・墨書)

拝啓 益々御清適奉賀候 陳八午唐突 伊藤公編秘か類纂の件二付 戸島通皓を為候間 御多忙中恐縮二候所 寸刻御引見被下度奉願候

草々頓首 栗野慎一郎

徳富猪一郎殿 侍史

封筒表 徳富猪一郎殿

封筒裏 赤坂榎町四番地 子爵栗野 慎一郎

小村 寿太郎(1855~1911 安政2~明治44) 飢肥藩(宮崎県)

明治時代の外交官。開成学校、ハーバード大。明治13年米國留学から帰国して司法省に入る。明治17年外務省に転じる。明治21年翻訳局長となり、井上馨・大隈重信兩外相の条約改正案に反対した。明治26年陸奥宗光外相に見出され、清國公使館一等書記官として北京に赴任。明治27年

日清開戦とともに政務局長に就任。明治29年外務次官、明治31年駐米公使、明治33年駐露公使を歴任。明治34年全権委員として北清事変議定書に調印した。明治34年~39年、第1次桂内閣の外相となり、軍備拡充、鉄道国有化と広軌化、中国・朝鮮における鉄道敷設など帝國主義政策の推進を主張。明治35年には日英同盟を締結しロシアに対抗。(陸奥外交)に続き、英米協調を主軸に大陸発展を企図する(小村外交)を確立した。明治37年日露開戦外交を指導。明治38年講和全権委員としてポーツマス条約に調印したが国民の不滿を買ひ、非講和運動が激発した。明治39年枢密顧問官を経て、駐英大使、明治41年からは第2次桂内閣の外相として日露協約締結・韓国併合・関税自主権の回復などを行った。明治44年侯爵となる。

明治(30)年11月27日付(封書・墨書)

拝啓 過日御談話有之候件に関し在京城加藤弁理公使へ及問合候処、別紙之通返電有之候に付右写差進候条御落手之上貴省大臣閣下へ御披露被下度 尤も右電信は秘密に付し被置度候 早々敬具

十一月廿七日 小村寿太郎

徳富参事官殿

(別紙)

明治三十年十一月 廿六日午后三時三七分發

午后五時三十分着

貴電第九十八号の件は全く無根の風説なり 尤も韓廷に對し不滿を懐く者共に於ては廢帝の意氣を漏す者予てより之れあることを聞居たるが 右等の輩が大葬時に乘じ非挙を企つるやも知れずとの考より 偶々投機者の計略に依て斯く大業なる浮説を伝へらるゝに至りたるものならん

封筒表 内務省 徳富参事官殿

封筒裏 小村外務次官

外交家としての小村侯(日だより 昭和13年9月18日 徳富猪一郎記)

小村外交の成功の一は、小村侯が内交に於て成功したからだ。大隈、青木、其他の人々の失敗は、外からよりも、寧ろ内からであった。此点に於ては前に陸奥あり、後ろに小村ありだ。この兩人は、一事を目論見るに際しては、先づ内を固めて、不

敗の地を占め、而して後其の全力を傾けて外に向うた。

加藤 高明 (1860~1926 万延1~大正15) 尾張藩(愛知県)

明治・大正期の外交官・政治家。東大卒。明治7年三菱会社に入社し、岩崎弥太郎の知遇を得、明治16年イギリスに遊学。帰国後、明治19年岩崎弥太郎の長女春路と結婚。官界に転じ、大蔵省銀行局長、駐英公使などをとめる。明治33年第4次伊藤内閣外相となる。日英同盟を推進した。明治35年高知県より衆議院議員に当選。東京日日新聞社長、第1次西園寺内閣外相、駐英大使、第3次桂、第2次大隈各内閣の外相を歴任。大正4年貴族院議員に勅選。翌年に憲政会総裁となる。大正13年護憲3派内閣の首相に就任。翌年普通選挙法、治安維持法、日ソ基本条約を成立させた。

明治30年4月21日付(封書・墨書)

朶雲拝誦 御病氣毛直ニ御快方ノ由 欣賀不斜候 昨日ボンマウスより相帰り申候 貴論ノ如ク陰晴定リナキ天氣ニテ幾分力散步運動杯ニ時害ヲ受ケ候得共 空氣清良ナルハ申迄モナク 近傍風景ニ富ミタル場所多ク久シ振大ニ氣晴ラシ致申候 来月上旬ニハ御出発ノ御心組ナル由 何卒夫迄ニ御順快ノ段相祈候 近日參上御見舞申上度 先ハ貴答方々御轉快ノ御喜申上候タメ如此御坐候 頓首

四月二十一日

加藤高明

徳富先生

追テ當国母皇即位六十年ノ祝典ニ御奉勅より有栖川宮殿下ヲ派遣セラ  
ルル趣公報ニ接シ申候

封筒表 Monsieur I.Tokutomi

16,Parliament,Hill Road,Hampstead,N.U.

川上 俊彦(1861~1935 文久1~昭和10) 越後(新潟県)

明治・大正期の外交官。東京外国語学校(東京外語大)。貿易事務官としてウラジオストク駐在中、日露開戦に際し、旅順開城後の乃木・ステッセル会見の通訳を務めた。明治42年10月にはハルビン総領事として伊藤博文をハルビン駅頭で迎え、伊藤暗殺の際、流れ弾にあたり重傷を負った。大正2年満鉄理事。大正10年ポーランド初代公使に赴任。大正12

年帰国し、ソ連代表ヨッフエと交渉、日ソ間の国交調整に当たった。昭和4年日魯漁業株式会社社長となる。

明治37年1月1日付(絵葉書・ペン字)

Mrs.Mrs.Tokutomi

東京赤坂区青山南町六丁目三十一番地 徳富猪一郎様 同奥様  
謹みて新らしき年の御挨拶申上候 御全家様の御幸福を祈り参らせ  
候  
俊彦 ときは

明治三十七年 正月 浦塩

金子堅太郎(1853~1942 嘉永6~昭和17) 福岡藩(福岡県)

明治時代の官僚・政治家。明治4年藩主に従い渡米。ハーバード大学で法学を修めた。明治21年帰国後、大学予備門講師、元老院大書記官などを経て制度取調局に入り、伊藤博文のもとで井上毅、伊東巳代治と共に明治憲法の起草の枢機に参画。欧米議会の典例に通じ、憲法付属法令の制定に貢献。その後、首相秘書官・枢密院議長秘書官・貴族院書記官長として引き続き伊藤に仕え、第3次伊藤内閣の農商務省、第4次伊藤内閣の法相と伊藤から重用された。明治33年伊藤の立憲政友会創立にも参画した。日露戦争中はセオドア・ルーズベルト大統領はじめ同窓の知己が多いことから、米国に特派され諒解工作に従う。明治39年枢密顧問官。維新資料編纂会総裁として『明治天皇紀』編纂の功により、昭和9年伯爵に叙せられた。

明治39年8月29日付(封書・墨書)

貴書拝誦 本年は久し振り家族一同当別荘に避暑いたし居候 御承知之通り日露戦争中米国に滞留しニケ年間別荘を空虚にし「松岡富嶽浪間鳴」は永らく莊主を見ざるが為今夏は殊に朝夕面前に欣然たるが如し 満韓の御視察紀事は国民新聞紙上にて毎日披読 殆んど身親しく其境界に在るが如し 併し御来訪之上親しく聴聞することを得ば幸福之に過ぎたることなし 一日吟杖を引き柴門に御来駕奉待候 今日昨午媾和条約締結の当日なり 既往の出来事を回顧すれば殆んど夢の心地致候 昨年は米国の旅館にて内外の電報を見て寝食を忘れたる身も 本年は聖恩に浴し湘南之別業に於て家族団欒之間に優遊自適夏日之炎熱を

知らざるは霄壤之差違 只驚歎するのみ 折柄在オイスター湾の大統領  
〔セオドア・ルーズベルト〕末男「クエンタン」(八歳)より豚児武  
鷹(同年齡)に郵便を以て大統領の別荘及其傍近之景色を写したる絵  
葉書を寄贈せられたるに依り 豚児よりは拙生之欣喜感慨胸中に溢れ 米  
人之厚情に對し深謝するの外なし 先刻桂伯を訪問し数刻談話したり  
昨夜当地に到着 病後なれども顔色並に精神とも良好なり 只氣の毒な  
るは昨夜盜賊同伯之別荘に忍び入り品物を窃取したるよし 是は厄払  
なりと主客相語りて大笑せり 拙生も来週末には帰京の積りに付其以  
前に御來訪奉待候 勿々  
八月廿九日 漢水生

封筒表 東京市京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎殿  
封筒裏 相州葉山村 金子堅太郎

#### 4 文人・新聞人

内藤 鳴雪(本名・素行)(1847~1926 弘化4~大正15) 江戸  
明治・大正期の俳人。松山藩士内藤同人の子。俳号の鳴雪は「世の中の  
ことはナリユキにまかす」つまり「鳴り雪」からとつたという。漢学を  
修めたのち京都へ遊学。長州征討の従軍などを経て、官吏となる。明治  
23年文部省参事官となるが、病のため翌年辞任。松山藩寄宿舎監督とな  
り、同舎生正岡子規の感化で明治25年に46歳で句作を始めた。豊かな学  
識と古典的格調を持つ俳人として知られ、生涯主宰誌はもたなかった  
が、「ホトトギス」などの俳句選者として指導的役割を果たした。句集  
に『鳴雪俳句集』がある。

大正13年6月29日付(封書・墨書)

拝復 先夜八如何ニモ失禮候 尤種々 徳永氏ニ関シテハ話シテ承リタル  
ハ大幸ニ奉存候 尚秘事文章ノ件ハ御面会ノ機会ニ口シ御教示ヲ乞ヒ  
或ハ申述度義モ有之先ハ御報又御挨拶まで 勿々敬具

六月廿九日

徳富蘇峰大人 玉机下

封筒表 市内京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様(親展)

内藤素行拝

封筒裏 麻布区開町百七五 内藤素行 六月廿九日

陸 羯南(本名・実)(1857~1907 安政4~明治40) 津輕藩(青森県)

明治時代のジャーナリスト・評論家。東奥義塾、宮城師範学校に学ぶ。  
明治9年上京して司法省法学校へ入学するが、藩閥を背景とする校長ら  
と衝突して、明治12年4月退学処分を受けた。一時北海道に渡つたが、  
再度上京して太政官書記局に仕官した。明治21年条約改正をめぐる欧化  
主義政策に反対して退官し、『東京電報』を創刊、社長となる。翌年新  
聞『日本』を創刊、社長兼主筆となった。正岡子規は新聞『日本』の記  
者時代、日清戦争の従軍記者として働いた。50歳で亡くなるまで、内  
政・外交に関し健筆をふるつた。社説・評論の趣旨は卓抜で、徳富蘇  
峰、朝比奈知泉らと共に言論界の代表的存在となった。

明治22年1月4日付(葉書・墨書)

恭賀新年

併せて平素ノ疎濶ヲ奉謝候

明治廿二年一月四日

神田北神保町十一番地

陸 實 葉書表 赤坂榎町五番地 徳富猪一郎様

陸羯南と予(人物景観) 徳富猪一郎著

現代人は陸羯南を知らず、知る者も驟ろ氣なる歴史的人物として看過するであら  
う。それほどに時代の流は急にして、且つ駛りつゝある。今夫机上の『羯南文録』  
を見て、宛も思い掛けなき場所にて、故人に出会したるが如き心地して、真に感慨  
無量のものがある。当時の新聞、『日本』は、新聞として完備のものでは無かつた。  
それが重きを天下に為したる所以は、社中に国分青陸、福本日南、正岡子規其他  
濟々多士であつたと云へ。専ら陸君が筆政の統帥たるが為めであつた。然も予が  
陸君に敬服したるは、其の文章よりも、其の議論よりも、其の人物であつた。予が  
陸君と始めて相見たるは、君が尚ほ未だ官報局の屬僚として、牛込揚場町に寓居し  
ていた際であつた。それが明治十九年の夏と覚ゆ。当時予が眼中に映じたる君は、  
一個の村夫子然たる重厚なる一書生であつた。爾来明治四十年、君が鎌倉極楽寺の  
別墅に於て逝く迄、時に相見、時に書信の往復をした。我等兩人は、新聞経営者と  
しては、競争者の位他に立ち、論壇の記者としては、殆んど互いに兩極の端に在つ  
た。年齢に於ては、君は安政四年に生れ、予は文久三年の生にして、其間六年の距

離があつた。乃ち其の生地も、君は東奥であり、予は鎮西である。此の如く我等兩人には、契合す可き要素よりも、反撥す可き要素が、より多かつた。然も我等の交誼は、一たび相見てより、遂に渝るところ無つた。対蹠的の兩人が、友好干係を二十年間に亘りて維持したるは、互ひに相い認識したるものもあつたためと云うの他はあるまい。但だ我等の間に、共通の友人があつた。其の一人は予が郷友の和田摩水君にして、他の一人は井上梧陰君であつた。羯南と摩水とは爾汝の間柄。梧陰はその師事と云わざるも、やゝそれに庶きものあつた。而して予を羯南君に紹介したるは、実に摩水其の人であつた。明治十九年の暮、予の『将来之日本』が出版せらるゝや貫字居士(?)の称号によりて、長文の批評が、『出版月評』なる雑誌に掲げられた。それが羯南君であることは、貫字の二字を合すれば、君の名一貫であることにて、直ちに看破せられた。然もそのことに就ては、君も語らなかつたし、予も敢て訊はなかつた。

営業の上から見れば、現時は新聞の黄金時代だ。されど新聞記者の黄金時代は、恐らくは明治の中期であつた。而して羯南君は實に新聞記者黄金時代に於ける、或る方向の代表者であつた。君は決して書齋的学究ではなかつた。さりとして単純の操觚者でもなかつた。君の志は恒に天下に在りて、其志を行うの方便として、記者生活に入つたのだ。而して其の志と始終した。

草間 時福(1853~1932 嘉永6~昭和7) 京都

明治・大正期の教育者・新聞記者・官吏。自由民権運動家、政治家、旧制松山中学(現・愛媛県立松山東高等学校)初代校長。安井息軒・中村正直に学ぶ。慶応卒。松山中学校長在任中、新聞で政府批判を行い禁固刑となつたほか、学内の論客と共に公開演説を行うなど民権運動にも携わつたため、明治12年に松山中学校長を辞職することとなつた。

大正8年12月30日付(封書・墨書)

拝啓 陳者先師岩垣月洲先生実父南涯岡田先生遺稿鋪糟集 今般令孫雨森南太郎氏於て口刊被致同好之士へ頒付方委頼を受候二付 乃ち一部特贈仕候 幸二御一覽賜り度如此御坐候 敬具  
十二月卅日

封筒表 相州逗子字桜山 徳富猪一郎殿  
封筒裏 東京赤坂臺町四十七 草間時福

夏目 漱石(本名・金之助)(1867~1916 慶応3~大正5) 江戸

明治・大正期の小説家。明治26年帝国大学英文科卒。東京高師、松山中学、五高教授を経て明治33年イギリスへ留学。明治36年帰国後、一高、東大講師となる。早くから漢詩文をよくし、正岡子規を知つて、俳句を学ぶ。「ホトトギス」などに評論文を発表、明治38年から『吾輩は猫である』を連載、小説家としての活動を始めた。『倫敦塔』『坊ちゃん』『草枕』など多彩な才能を示す作品を次々に発表した。明治40年教職を辞して朝日新聞に入社し、作家生活を始め、『三四郎』『それから』『門』などを発表した。明治44年文相から授与された文学博士の学位を辞退した事は漱石の人柄を示すものとしてよく知られている。神経衰弱や慢性の胃病を抱え、『こゝろ』『道草』『明暗』などの作品で近代知識人の内面を描いた。門下には森田草平、小宮豊隆などすぐれた作家、文学者がいる。

明治42年2月9日付(封書・墨書)

拝啓 御刊行の横川和尚撰五山百人一首二百部のうち第五百十号先日高浜虚子の手より正に落掌 難有御礼申上候 日常御多忙の折這般の風流に閑日月を弄せられ候御余裕羨敷限に候 正是雪村老漢の鏝湯炉炭起清風の一句に相当するものと存候 頃日机辺に集積する所の書巻は悉く生存競争の臭味有之久振にて此好事の雅集に接し陋懐頓に一碗の苦茗を喫したるの感有之 たゞ俗用蝸集静かに緬邈の趣を致す能はず 玉腕和尚の軒前修竹綠娑婆 玉立三竿不用多 好是満山風雨夜 虚心相對亦他無の一首を挙げて感謝の辞に代へ申候 草々 頓首  
二月九日 夏目金之助  
蘇峰先生 侍史

封筒表 京橋区日吉町四 国民新聞社 徳富猪一郎様  
封筒裏 牛込早稲田南町七 夏目金之助

森 鴉外(本名・林太郎)(1862~1922 文久2~大正11) 津和野藩(島根県)

明治・大正期の軍医・小説家・評論家。東大医学部。陸軍軍医となり明治17年ドイツに留学。明治21年帰国後、陸大・軍医学学校の教官となる。明治22年訳詩集『於母影』を出版し、雑誌『しがらみ草紙』を創刊。明治23年には『舞姫』を『国民之友』に発表するなど、翻訳・評論・小説

家として活躍。日清戦争では軍医として出征。明治28年陸軍軍医監に任ぜられ満州（中国東北地方）から台湾へ転征。明治31年近衛師団軍医部長兼陸軍軍医学校長、翌年第12師団軍医部長として小倉に赴任。日露戦争には第2軍軍医部長として出征。明治40年陸軍軍医総監。軍医としての公的生活と、文学者、私人として矛盾する生活の苦悶が、鴟外独自の文学を生み出した。

明治(23)年9月29日付(封書・墨書)

拝啓 一昨日早朝差出し候批評家の秘訣なる一篇 余りつまらぬ者に候へどもいさゝか解嘲の意味も有之候ひしに 今に御掲載無之 果して御没書に相成候ものによ 右件御手数御煩し度候也 早々不乙

九月廿九日

森林太郎

徳富猪一郎様侍史

封筒表 京橋区日吉町四番地国民新聞社 徳富猪一郎様

封筒裏 下谷区上野花園町 森林太郎

与謝野 晶子(本名・晶)

(1878~1942 明治11~昭和17) 大阪

明治・大正・昭和期の歌人・詩人。堺女学校卒。関西青年文学会に参加。

明治33年来阪した与謝野鉄幹・山川登美子を知る。翌年家を捨てて上京。歌集『みだれ髪』を出版し、鉄幹と結婚。明治37年9月『明星』に掲載された「君死にたまふこと勿れ」の詩は日露戦争・旅順攻撃に参加した弟の無事をひたすら祈ったものであるが、社会性をもった内容がこの時代には大胆な主張とされ多くの論争を引き起こした。大正10年に創設された「文化学院」では学監となるなど女子教育の実践にも携わり、文学のみならず教育・婦人・社会問題と幅広い著述がある。

大正6年3月11日(封書・墨書)

啓上 ごきげんよく入らせられ候御事を いつもおよろこび申上げをり候 またまた拙き私の随筆二對し 勿体なき御評を頂きくり返し拝見して 忝く存じ申候私のごとき者をお引立て下され候思召二由る事と深く御恩情を思ひ候 こゝに失礼ながら書中にて御禮申上候 奥様二も御安泰二入らせられ候ことを賀上候 私の尊敬をお傳へ下されたく候 拜具

三月十一日

徳富先生 御前

封筒表 市外大森山王 徳富猪一郎先生 御前

封筒裏 下荻窪三七一 与謝野晶子

山田 美妙(本名・武太郎)

(1868~1910 明治1年~明治43) 東京

明治期の小説家・詩人・評論家。言文一致体および新体詩運動の先駆者として知られる。神田柳町に南部藩士山田吉雄の長男として生まれる。大学予備門中退。正岡子規とは同窓。予備門に在学中の明治18年に友人の石橋思案、尾崎紅葉、丸岡九華らと文学結社である硯友社を結成し、雑誌『我楽多文庫』を編集・刊行した。同誌に発表した「嘲戒小説天狗」は、言文一致体で書かれた小説として先駆的なものであった。蘇峰の創刊した『国民之友』に掲載された『胡蝶』は渡辺省亭の裸体の挿絵とともに評判を呼んだ。紅葉とはその後疎遠となり、美妙が金港堂が刊行した雑誌『都の花』の主筆に迎えられるからは、硯友社と関係を絶つようになつて人気も落ち、晩年は病と貧しさに悩まされるさびしいものであった。

明治32年5月24日付(封書・墨書 原稿用紙)

拝啓 筆硯益々御多祥奉賀候 陳ば突然ながら御相談申上候は 他の儀にあらざる小生の友人にして国事探偵にして 日清戦役にも従事し其以來一意死を以て国家に期せしものにて過日服毒して死せしもの有り素より一個の志士にして宮廷にも知己多く 戦争前七年間は女装して馬関 釜山の辺を往来し又笑顔とモルヒネと短刀とをば常に懐中にしていざと言はゞ自殺の覚悟もなし居り 又常に癩病患者の写真四十葉などを携へて 折々女色を思ふ時にはそれを見て自ら情慾を節するが如き奇行有り 憂憤して死に至るまでの心事は小生の外に一二宮内省の人士の外に知るもの無く その経歴の奇々妙々宛然小説的の面白きは人をして明治の今日にも如此志士有るかと思はしむる計りに候 因之過般来某伯爵とも相談し段々その経歴を採集しては一部の小説を成す迄に至り候 同人より小生が聞きし隠微なる宮廷の内情 またその慷慨義烈の事蹟は少なくも人をして感奮せしむるに足る所有るべしと信じ候に付ては 吾敬愛する国民新聞紙上を借りてつづさに世に紹介し

たき存念 而も久しぶりの小説の起草髀肉うづく計りの心地いたされ候 思召如何にや乍憚至急御知らせ被下度 御返辞次第本人の経歴の魂飛び肉動く計りなる所を口頭にて一先御咄し申上げ 然る後起稿仕候ても宜敷候 情迫り居候に付至急恐入候へども御返辞被下度候 報酬などは御見込にて宜敷 又匿名にして出しても宜敷 その事実の咄に Romanticなるは保証仕候 敬具

五月廿四日  
美妙

封筒表 京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様  
封筒裏 返子村 山田美妙<sup>㊦</sup>

### 5 日露戦争関係絵葉書

明治37年9月から通信省は「日露戦役記念」の絵葉書を発行した。これが大変な人気を呼び、発売の日には早暁から郵便局の前に人波ができたという。

#### 展示絵葉書

- ・ 明治三十七八年戦役陸軍凱旋観兵式記念
- ・ 大山巖・山県有朋・野津道貫・奥保鞏・黒木悌次郎・乃木希典・児玉源太郎・川村景明の集合写真
- ・ 水師營ニ於ケル彼我司令官ノ会見
- ・ 手を差し出す乃木希典にお辞儀をするステツセル將軍の絵
- ・ 連合艦隊各司令長官以下及大本営海軍將官以下幕僚の集合写真
- ・ 東郷平八郎を中心に、連合艦隊各司令長官達が並んでいる。
- ・ 日本帝国軍の軍服 4枚組
- ・ 他20枚

### 6 書幅・美術品

#### 蘇峰の書(書幅)

##### ① 遼東還附の詩

誰下天書泣萬民 遼東朔北化荊榛

諸公謀國襟懷大 百戰山河坐附人 蘇峰生

② 風雲人思 老蘇八十二

③ 艱時偉人思 蘇翁九十一

④ 浮世夢一場 昭和丙戌七月初九 頑蘇八十四(達磨画)

明治三十八年九月五日十一時、主な在社の面々(巻物)

明治38年9月5日、日比谷で日露戦争後の賠償に対する不満を持つ民衆が講和条約反対を唱え決起集会を開き、怒りで暴走した民衆たちによつて日比谷焼打事件が起きた。政府系新聞社である国民新聞社も焼打を受けた。徳富猪一郎はじめその日に在社していた社員65名がサインをし、一巻の巻物にしている。字の勢いから、暴徒に襲われそうな社内の恐怖と、社を守ろうとする彼らの武者振りが感じられる。蘇峰43歳の時であつた。

#### 乃木希典書状(書幅)

明治(41)年5月28日付(封書・墨書)

拜啓 別紙吉田庫三氏より可入御覽送越候 然ルニ御通覽後二今一週間計り入用之由 若シ一週間以上御留置シモ相成候義ナラハ吉田氏今少し取調候上可差出ト申添有之 私も披見ノ暇無之差出候間 何分ハ貴意ノ程御示相待彼方へ可申遣取込中乱筆御免可被下候 勿々頓首  
五月廿八日 乃木生  
徳富様

封筒表 青山南町六丁目 徳富様 写本老冊添

封筒裏 赤坂新坂町 乃木拜

(蘇峰追記)

是乃木大将書牘也 其歲月雖不明確 蓋明治四十年以降也欵  
昭和十五年十一月 老蘇七十八

#### 東郷平八郎の書(書幅)

山唱萬歲聲 為蘇峰大人 八十七歳 平八郎書

橋本雅邦画 「四季山水」(四幅)

橋本 雅邦 (1835~1908 天保6~明治41) 江戸

明治時代の日本画家。狩野勝川の門に学ぶ。維新前後から窮乏の生活が続いたが、明治12年第一回絵画共進会でようやく認められ、明治17年の共進会でフェノロサの知遇を得、以後岡倉天心らと日本画革新の運動を推進した。天心とともに横山大観・菱田春草・下村観山・川合玉堂ら多くの逸材を育てた。

長谷川栄作画 「西国33番集印記念観音像」

長谷川 栄作 (1890~1944 明治23~昭和19)

明治・大正・昭和期の彫刻家。吉田芳明に木彫をまなぶ。芳洲と号し、大正3年文展で「夢」が初入選。官展を中心に活躍し、栴檀社、東邦彫塑院を結成した。

西郷隆盛着用外套

証明書付「西郷南洲翁の着用されしものにして、明治十年西南戦争中、南洲翁より逸見十郎太氏に給わりしもの」

この外套を鹿児島に出かけた実業家茂木育造が手に入れ、土産として蘇峰に贈った。(昭和二十九年八月十一日付蘇峰宛茂木書簡による)

この後、徳富蘇峰記念館の創立者塩崎彦市が二宮で蘇峰を囲む親睦会を催した折、その返礼として蘇峰からこの外套を恵贈された。

\*逸見十郎太は西郷軍の中でも突出した天才で弱冠二十九歳の最年少隊長。西南戦争で流弾で没した。

参考文献

- ・『蘇峰とその時代』高野静子著 中央公論社 昭和63年
- ・『続・蘇峰とその時代』高野静子著 徳富蘇峰記念館 平成14年
- ・『近代日本史料選書7-1 徳富蘇峰関係文書』山川出版社 1982年
- ・『近代日本史料選書7-2 徳富蘇峰関係文書』山川出版社 1985年

蘇峰堂だより

- ・『第一人物随録』徳富猪一郎著 民友社 大正15年
- ・『人さまさま』徳富猪一郎著 民友社 昭和6年
- ・『我が交遊録』徳富猪一郎著 中央公論社 昭和13年
- ・『人物景観』徳富猪一郎著 民友社 昭和14年
- ・『蘇翁感銘録』徳富猪一郎著 宝雲舎 昭和19年
- ・『コンサイス日本人名事典(第4版)』(株)三省堂 平成13年
- ・『大人名事典』平凡社 昭和28年
- ・『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 平成6年
- ・『坂の上の雲』司馬遼太郎著 文芸春秋 平成11年

平成22年7月 高野静子著『蘇峰への手紙 中江兆民から松岡洋右まで』が藤原書店より出版された。

・徳富蘇峰の碑文や著作物、肖像写真に関する問い合わせが多い年であった。・書簡を読むにあたり、「塵外館」(茅ヶ崎)の皆様のご協力をいただきました。

徳富蘇峰記念館案内

■開館日 月・水・金曜日

〈特別開館日〉2月(梅の季節)は土・日曜日も開館

〈特別閉館日〉年末・年始 8月の第3・4週

■開館時間 午前10時~午後4時

■入館料 大人 500円 中・高生 200円 団体割引(10名以上) 一割引 450円

平成二十三年二月五日発行

編集 高野 静子

宮崎 松代

和田 千枝

発行者 竹越 起一

発行所 (財)徳富蘇峰記念塩崎財団

〒510-2233 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五

TEL 〇四六三一七一一〇二六六

FAX 〇四六三一七一〇六七七

ホームページ <http://www.2ocn.ne.jp/~tsoho/>  
E-mail: [tsoho@peachocn.ne.jp](mailto:tsoho@peachocn.ne.jp)

定価 100円